第４章

札幌市の歴史文化

第 4 章　札幌市の歴史文化

1　札幌市の歴史文化の特徴

(1) 歴史文化の特徴の整理の考え方

この計画における歴史文化とは、文化財とその周辺環境（文化財が置かれている自然環境や周囲の景観、文化財を支える人々の活動に加え、文化財を維持･継承するための技術、文化財に関する歴史資料や伝承等）とが一体となったものを意味します。札幌の多様な文化財の価値や魅力を理解し、保存・活用を考える上では、文化財を生んだ札幌の歴史文化の特徴を踏まえることが大変重要です。

この計画の策定にあたっては、札幌市の歴史文化の特徴について、空間的観点（自然環境や地形など）・地域社会的観点（社会を大きく変えた出来事など）・歴史的観点（歴史文化の時代を超えた継承）から、下図のようなステップで整理することとしました。

関連文献や既往調査結果と文化財の現状等を踏まえて導き出した 6 つの歴史文化の特徴は、今後の札幌市の文化財の保存・活用を考える上で重要な視点として、(2)「札幌市の歴史文化の特徴」において示しています。

■札幌市の歴史文化の特徴の整理

【札幌市の歴史文化の特徴】

① 原始の昔から育まれた人々の暮らし
② 幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設
③ オリンピックで変わった街の姿と市民の意識
④ 都心で楽しむ季節の催し・風物詩
⑤ 積雪寒冷地に成立した大都市
⑥ 継承されるアイヌ文化

一方、この計画の策定に際し、市民参加による文化財の調査・把握の取組として開催した市民ワークショップ（『れきぶんワークショップ』）や、札幌市歴史文化基本構想策定委員会においては、地域の自然や歴史上の出来事などを反映した札幌市の歴史文化の特徴について、上記のステップと異なる視点からも様々な意見が交わされました。

市民が「守り伝えて行きたい」、「誰かに伝えたい」と考える札幌市の歴史文化の特徴について、今後も市民等の間で多様な意見が交わされることが、文化財の保存・活用を進める上で重要であることから、これらについて、(3)「市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴」として紹介しています。

【市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴】

- 各地に開かれた屯田兵村
- 今も親しまれる地産建材
- 「馬鉄」に始まった路面電車
- ななめ通りから見る札幌村の歴史
- 手稲山麓に残る鉱山村の記憶
- 水の恵みに支えられた西区の稲作文化
- 日本酪農の父が残した足跡
- 歩兵第 25 連隊のまち月寒

■札幌市の姿を表す「キーワード」の抽出【ステップ１】

【地域社会的観点】

■都市の成熟期におけるまちづくり
平成に入ってからも都市機能の集中が進み、人口も緩やかに増加しているが、前都市計画マスタープラン策定後は市域を拡大していない。
都心部の都市再生の取組により、札幌駅前通地下歩行空間の整備や創成川公園の整備を実施。
第三次産業が盛んとなり、なかでも観光が重要な柱の一つとなっている。

■冬季オリンピック札幌大会の開催
冬季オリンピックの開催が決定すると、市役所新庁舎、地下街などが相次いで完成、地下鉄の開通や民間企業の建設ラッシュが起こった。

■戦争の勃発とその後の人口増加
昭和に入ると日中戦争や太平洋戦争勃発により、食糧難など市民生活には様々な影響があった。その後、昭和 30 年代の町村合併により市域が拡がり、引揚者や炭鉱離職者の流入など、景気や産業構造の変化に伴う人口急増により、都市としての規模が拡大した。

■市制の施行
大正 11 年には市制を施行し、その翌年には旧都市計画法が適用された。

■北海道開道 50 周年記念博覧会の開催
大正に入ると企業や金融機関の市内への進出が進み、路面電車や定山渓鉄道等の公共交通が発展した。また大正 7 年の開道 50 周年記念博覧会の開催等により商業活動が活発化した。

■総合的な交通ネットワーク
現在の国道 5 号、12 号、36 号となる周辺都市間や村落間を結ぶ道路が形成、札幌手宮間の鉄道が開通する等、交通網が整備された。

■開拓使が進めた都市形成
明治 2 年に開拓使が札幌に本府建設を開始、市街地の開発を進めた。先進国の農業、産業、教育の導入のため葡萄園や試験農場、各種工場（ビール、生糸等）、農学校が設置され、軟石の採掘も進められた。明治 7 年に屯田兵制度が制定され、琴似や山鼻等市街地周辺の開拓が進んだ。

■移民政策による蝦夷地開拓
大友亀太郎が慶応 2 年に御手作場の開発に着手、同時に大友堀を開削した。

■イシカリ十三場所の設置
1700 年代後半から、石狩地方に松前藩士がアイヌ民族と交易するための商場（後のイシカリ十三場所の一部）が成立し、アイヌ民族と松前藩との交易が盛んに行われた。

■地中に埋もれた遺跡（埋蔵文化財）
札幌市内には、500 箇所以上に及ぶ遺跡があり、旧石器文化の石器、縄文文化と続縄文文化の土器や石器、擦文文化の土器や木器などが見つかっている。

【空間的観点】

■鮮明な四季と多種多様な植生
札幌市は北緯 43 度の中緯度に位置するため、四季の変化が鮮明で、かつ、日本海を通過する冷たい寒気が樺戸山地や札幌西部山地に衝突、上昇することにより大量の降雪をもたらす。さらに、市内には山地、丘陵・台地、扇状地、低湿地、砂地など多様な地勢や土壌が存在し、また、温帯落葉広葉樹林と冷温帯針広混交林の境界域にあるため多種多様な植生が存在するとともに、これらの環境が後の札幌のさまざまな生業を支える基盤となった。

■南部の山地・丘陵地と北部の低地をつなぐ扇状地
藻岩山等の南西部の美しい山々、月寒台地等の南東部の丘陵地、北東部の石狩低地帯、豊平川によって扇状地が形成されている。

■キーワードで文化財を整理し、歴史文化の特徴を整理【ステップ 2～3】

歴史的観点	時代区分	旧石器文化 縄文文化 続縄文文化 擦文文化	アイヌ文化期以降	近現代			
地域社会的観点	時代背景 キーワード		イシカリ十三場所設置 大友堀開削（慶応2）　など	開拓使設置（明治2）屯田兵制制定（明治7） 総合的な交通ネットワークの確立 50周年年記念博覧会開催 市制施行（大正11） など	冬季オリンピックの開催（昭和47） 本格的な都市計画事業実施　など	市の成熟期におけるまちづくり など	
	考古学的遺産	旧石器、縄文、続縄文、擦文文化の遺跡、出土品　など	アイヌ文化期の遺跡、出土品　など				① 原始の昔から育まれた人々の暮らし
	札幌市の都市形成 （イシカリ十三場所、御手作場、開拓使、農学校）		荒井金助／早山清太郎／大友亀太郎／御手作場／創成川（大友堀）／吉田茂八／志村鉄一／道道花畔札幌線（ななめ通り）　など	島義勇／清華亭／開拓使文書／開拓使札幌本庁舎跡及び旧北海道庁本庁舎／豊平館／旧札幌農学校演武場（時計台）／ウィリアム・スミス・クラーク／エドウィンダン記念館／旧開拓使工業局庁舎／すすきの／ビール工場／碁盤の目の街並み／北大植物園・博物館／北海道大学古河記念講堂／北星学園創立百周年記念館／北海道大学附属植物園庁舎／北海道大学／遠友夜学校　　など			② 幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設
	札幌冬季オリンピック （競技場、地下鉄、地下街）				札幌市営地下鉄／オーロラタウン・ポールタウン／大倉山ジャンプ競技場／真駒内セキスイハイムアイスアリーナ／真駒内公園／サッポロテイネなど		③ オリンピックで変わった街の姿と市民の意識
	風物詩 （まつり、各恒例行事、公園）			北海道神宮／北海道神宮頓宮／札幌まつり／円山公園／大通公園／中島公園／円山の花見　など	さっぽろ雪まつり／さっぽろ大通ビアガーデン／豊平川花火大会／ホワイトイルミネーション　など	YOSAKOI ソーラン祭り／サッポロシティジャズ／パシフィックミュージックフェスティバル／さっぽろオータムフェスト　など	④ 都心で楽しむ季節の催し・風物詩
	積雪寒冷地 （雪、除雪、建築様式）				除雪技術／北方圏型規格住宅　など	雪氷熱／モエレ沼公園　など	⑤ 積雪寒冷地に成立した大都市
	アイヌ文化 （アイヌ語地名、コタン、歌、踊り、アイヌ文化施設）		アイヌ古式舞踊／天神山チャシ／アイヌ語地名／コタン　など	アイヌのまるきぶね／知里真志保／違星北斗／ジョン・バチェラー／バチェラー八重子／ウタリグス　など	アシㇼチェㇷﾟノミ／札幌アイヌ協会（北海道アイヌ協会）など	ウレシパモシリ北海道イランカラㇷﾟテ像／北海道アイヌ総合センター／サッポロピㇼカコタン／北海道博物館　など	⑥ 継承されるアイヌ文化
		豊かな自然や地形が文化財に影響					
空間的観点	自然・地形	サッポロカイギュウ／藻岩山／円山／天神山／手稲山／円山原始林／藻岩原始林／豊平川／厚別川／琴似発寒川／伏古川／月寒川／扇状地／湧水（メム）／イタヤカエデ／オオモミジ／サクシュコトニ川／鮮明な四季／雪　など					

：時代の流れ

表中に記載した文化財等は、札幌の歴史文化の特徴を整理するにあたり、構想策定委員会や市民からのアンケート調査、れきぶんワークショップ等で名前があがった文化財等の一部です。表を構成する上で複数の欄に重複して記載したものもあります。

(2) 札幌市の歴史文化の特徴

①原始の昔から育まれた人々の暮らし

札幌は、石狩低地帯の西側で、西部北海道の東北の縁に位置しています。地形・地質から見ると、市域の北西部から南西部にかけては山地地域があり、東部には丘陵地や台地地域、さらに豊平川や発寒川につくられた扇状地、そして北部の沖積平野から成り立っています。また、石狩湾沿いでは、複数の砂堤列が並び、最も古い海岸砂丘である紅葉山砂丘が、札幌北西部から石狩市にかけて発達しています。

札幌で最初に人類がその足跡を残したのは旧石器文化の人々で、今から 1 万数千年前の最終氷期まで遡ります。約 4 万年前頃、支笏カルデラ形成に伴う火山の大噴火によって石狩低地帯南半をほぼ埋め尽くした支笏火砕流堆積物は札幌市域にも到達し、西岡台地、月寒台地、清田台地、厚別台地が形成されます。札幌で見つかっている旧石器は、この西岡台地、月寒台地、清田台地を流れるラウネナイ川～月寒川上・中流域に分布しています。

その後、徐々に温暖化が進み、今から約 8000 年前頃の縄文早期になると、温暖で安定的な気候となり、いわゆる縄文海進が始まって、札幌北部に海水が侵入します。今から約 6000 年前、縄文前期も終わり頃に近づくと、河川の作用によって北西部には砂州が発達し、内湾となっていた低地は土砂で埋め立てられていきます。この頃から、南東部の丘陵・台地、豊平川や発寒川がつくった扇状地、そして北西部の海岸砂丘まで、低湿地を取り囲むように、あらゆる場所に人々が暮らすようになります。札幌の縄文遺跡の数は中期のものが最も多く、その理由の一つとして、この時期に温暖で暮らしやすい自然環境が広がっていたことが関係していると言ってもいいかもしれません。

今から約 4000 年前を境に、再び気候が寒冷化していきます。3000 年前頃には、現在よりも年平均気温で 1～2℃ほど低くなり、海水面も 2m程度下がっていたと考えられています。この頃は、ちょうど縄文後期以降に相当し、遺跡の数も徐々に減少していきます。海水面が下がることによって海岸線が後退すると、内湾も消失し低湿地は乾燥し始めます。東区丘珠町で見つかった丘珠縄文遺跡（縄文晩期～続縄文）は、低湿地を利活用した先駆けの遺跡だといえます。

これ以降、続縄文文化、擦文文化の人々は、低地部にも積極的に生活圏を拡大していきます。この頃になると、人々は主に扇状地から沖積平野にかけて、当時の河川に沿うように集落を形成していきます。擦文文化の遺跡の調査では、主にシカやサケなどの動物性資源のほか、アワ、ヒエ、キビなどの栽培植物種子も見つかっており、人々は、狩猟、漁労、採集だけではなく、本州との交易を通じて雑穀栽培といった新たな生業も取り入れながら、低地部の資源利用や河川流域のネットワークを重視する暮らしを定着させていったようです。

札幌市の遺跡分布図
出典：札幌市埋蔵文化財センター

②幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設

江戸幕府が札幌を北海道開拓の拠点として選定した背景には、大河石狩川の舟運により内陸部や日本海、太平洋へも通じる地の利に加え、外国の脅威、特にロシアの南進に備える意図があったとされています。この選定に影響を与えたのは、北海道の名付け親として有名な松浦武四郎による推薦で、武四郎は、文化年間（1804 年～1817 年）に近藤重蔵が残した記録を基に現地の二人のアイヌ民族の首長の協力を得て周辺を調査し、豊平川を遡る 3 里（約 12km）の地（札幌）がその適地であると考えていました。

以後、大友亀太郎による札幌元村の開村をはじめ、各地に入った移住者たちにより、後に市域を構成することとなる各地における農地等の開拓が盛んになっていきます。

その後、明治 2 年（1869 年）の開拓使設置により、明治政府による北海道開拓の拠点として、現在の札幌市都心の基礎となる本府の建設が始まりました。開拓判官の島義勇は、地形や地盤が比較的安定し、豊富な地下水を利用可能な豊平川扇状地上に、碁盤の目状に整然と区画された街区と機能別の区域分けが特徴の市街地整備計画を策定します。

黒田清隆が開拓次官に就任した明治 3 年（1871 年）からは、大規模開拓に成功していたアメリカに倣うため、開拓使顧問として招いたホーレス・ケプロンの構想「開拓使十年計画」により、札幌農学校初代教頭として知られるウィリアム・クラーク、豊平橋の設計者としても知られるウィリアム・ホイラー、北海道の畜産業の発展に貢献したエドウィン・ダンら、多くの御雇い外国人の力を借りながら、都市建設や近代産業導入、将来を担う人材育成などが進められました。

幕末から明治へ、外国の脅威も背景に、国家主導で行われたこれらの開拓事業は、後の道都・札幌の基礎の形成につながるものでした。

明治8年の札幌市街地
出典：さっぽろ文庫別冊地図（明治編）

③オリンピックで変わった街の姿と市民の意識

昭和 47 年（1972 年）の冬季オリンピック札幌大会は、アジアで初めて開催された冬季オリンピック大会であり、この大会の成功は、札幌の街の構造上の変化に加えて国際化を促すとともに、市民の誇りやアイデンティティの形成にも貢献したと考えられます。

大会にあわせて多くの競技施設が設けられるとともに、都市機能の整備・向上が進められ、民間資本による建設ラッシュも相まって、街並みや市民生活に様々な変化がもたされました。象徴的なものとして、いずれも大会前年の昭和 46 年（1971 年）に、今も市民生活に欠かせない、市営地下鉄南北線（当時は北 24 条駅～真駒内駅間）と、さっぽろ地下街（オーロラタウン・ポールタウン）が開業しました。オリンピック競技を間近に観戦し、その熱気を感じたことで、市民の中にウインタースポーツに親しむ文化が定着したことも、その後多くのウインタースポーツの世界大会が開催されることになる札幌にとっての変化と言えるかもしれません。

札幌オリンピックで使用された施設の中には、市内の展望スポットとして人気が高い大倉山や宮の森のジャンプ競技場など、現在様々な形で市民や観光客に親しまれているものも多く、スキージャンプのスタート地点から助走路越しに市街地を望む大倉山展望台は、近年、夜景観光でも注目されています。アルペンスキー競技の会場となった手稲山のスキー場には現在も聖火台が残り、かつて行われた競技種目をその名に冠したいくつかのコースが、訪れる人々にその歴史を伝えています。

冬季オリンピック札幌大会をきっかけに造られた道路や交通機関、施設位置図

④都心で楽しむ季節の催し・風物詩

札幌は、四季が鮮明と言われる日本にあって、おそらく最もその傾向が顕著な大都市です。これは、中緯度地域の中でも、夏と冬の日照量較差が大きい北緯 45 度付近（42～43 度）に位置するためですが、大都市でありながら豊かな自然にも恵まれており、加えて多雪であることも、季節の変化をはっきりと印象付ける要素といえます。

札幌には、市街地で楽しめる風物詩のような祭事やイベントも多く、例年 6 月 14 日から 16 日にかけて行われる「札幌まつり（北海道神宮例祭）」は、明治 5 年（1872 年）に始まる北海道神宮（旧札幌神社）の例祭を起源に 1 世紀以上の歴史があり、鮮やかな衣装をまとった千人以上の市民が神輿や山車とともに市中を練り歩く「神輿渡御」は、本格的な夏の到来を待ちわびた多くの市民の目を楽しませます。

大通公園は、芝生、木々や花壇がオフィス街に潤いを与えるだけではなく、広大なオープンスペースを生かした催事場として、市民や観光客に親しまれてきました。終戦間もない昭和 25 年（1950 年）には、冬の札幌を代表するイベントといえる「さっぽろ雪まつり」が、中高生による 6 基の雪像製作でスタートし、昭和 34 年（1959 年）には、初夏の訪れを告げる「ライラックまつり」が、同年夏には、「大通ビアガーデン」が催されるようになりました。昭和 56 年（1981 年）には、市街地の初冬を飾るホワイトイルミネーションの会場となり、近年では北海道の食を楽しむ秋のイベントとして、「さっぽろオータムフェスト」が人気を集めています。

円山公園が花見の名所として知られるようになったのは、明治 10 年代末頃といわれています。大正 12 年（1923 年）には市電の路線が円山公園まで延伸され、花見シーズンには 1 週間限定で花見特別輸送便が運航しました。北海道の花見の特徴として、ジンギスカンを食べながら花を楽しむ習慣があり、満開の桜の下で炭火を囲む光景も、札幌の特徴的な風物詩のひとつといえるでしょう。

さっぽろ雪まつり(第 1 回)
雪像「熊」
出典：札幌市観光協会

雪まつり 2011 年

大通公園ビアガーデン 1981 年
札幌市公文書館所蔵

大通公園ビアガーデン 2014 年

札幌神社の花見 1900 年
北海道大学附属図書館所蔵

円山公園の花見 2006 年

札幌まつり 1960 年
札幌市公文書館所蔵

札幌まつり
札幌市公文書館所蔵

⑤積雪寒冷地に成立した大都市

札幌市は、約 197 万人の人口を抱える大都市であると同時に、年間 5mの積雪に見舞われる多雪都市です。大都市での人々の暮らしが、これほど多くの雪と向き合う例は世界でもほとんどなく、このことは、札幌に暮らす人々が、雪や寒さの中で快適に暮らすため、様々な創意工夫を重ねてきた結果であるといえます。

また、札幌市は、「冬は資源であり、財産である」のスローガンのもと、世界の冬の都市が集まり、冬の技術や経験を学びあうためのネットワークである「北方都市市長会」（現「世界冬の都市市長会」）の設立を昭和 56 年（1981 年）に提唱し、以来、その活動を通じて積雪や寒冷という気象条件を共有する世界の冬の都市のより良いまちづくりに貢献してきました。

明治の初め頃、雪が積もると、人々がかんじきを履き、雪を人力で踏みしめて道を付けていましたが、明治 19 年（1886 年）にはロシア式の馬そりを改良した三角ぞりが、昭和 21 年（1946 年）にはアメリカ軍から借用したブルドーザーが除雪機械として登場し、昭和 47 年（1972 年）の札幌オリンピック開催を機に近代的な除排雪体制が整備されました。明治 21 年（1888 年）には市民に雪踏み除雪の協力を要請した記録があり、行政と市民の協働により冬の快適な道づくりを進めてきたことが想像できます。大正 7 年（1918 年）には、今も冬の風物詩として親しまれるササラ電車[56]が登場しています。

旧三菱鉱業寮の二重窓

積雪寒冷地に住むための工夫は、住宅地の景観にも現れます。冷気を遮断する二重窓[57]は、一般には戦後に普及しましたが、明治 21 年（1888 年）建築の北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）では既に採用されていました。興味深い例としては、明治 13 年（1980 年）頃建築の旧永山武四郎邸の窓は一重の上げ下げ窓ですが、渡り廊下でつながる昭和 10 年代建築の旧三菱鉱業寮は、寒冷地仕様の二重窓です。

三角屋根の家
札幌市公文書館所蔵

また、屋根に積もった雪が凍り付く札幌では、本州のような瓦屋根は定着せず、傾斜のついたトタン屋根がかなり古くから採用されていましたが、昭和 30 年代以降には、積雪による住宅への荷重や「すが漏れ[58]」、庇の雪やつらら落としの負担を軽減できる急勾配の三角屋根が普及しました。近年では、一見平坦な無落雪屋根[59]を持つ箱型に近い形状の住宅が一般化し、郊外の住宅地などでは特徴的な街並みを形成していることもあります。

粉塵[60]被害が深刻化したことに対応した 1990 年代以降の自動車のスパイクタイヤ規制とその後のスタッドレスタイヤの普及は積雪時の景観も向上させました。このほか凍結した舗装路面での転倒防止のための「撒き砂」や、多くの市民が凍結路面で転ばないための歩き方を体得していることなども、積雪寒冷都市の生活文化における暮らしの特徴かもしれません。

---

[56] **ササラ電車**：車両の前後に取り付けた、竹のササラを利用した除雪装置で雪を掃き飛ばす除雪用の電車。

[57] **二重窓**：遮音・断熱などのため、二重の構造にした窓。

[58] **すが漏れ**：屋根に積もった雪が溶けて、水が室内に侵入すること。

[59] **無落雪屋根**：積もった雪を載せた状態のままで自然処理をする構造を持った屋根。

[60] **粉塵**：空気中に存在する固体の微粒子。

⑥継承されるアイヌ文化

札幌が都市として形成された過程における大きな特徴のひとつとして、先住民族であるアイヌ民族が生活していたところに、本州ほかの各地からたくさんの移民が移り住み、比較的短期間で急速に都市が形作られたということがあると考えられます。

近世以前まで、札幌の地を生活の舞台として長く暮らしてきたのは、主としてアイヌ民族でした。万延元年（1860 年）頃に成立した西蝦夷地石狩場所絵図[61]などからは、サクシュコトニ川沿いに暮らす琴似又一ら、発寒川流域に暮らすコモンタら、フシコサッポロ（伏古）川流域に暮らすルヒヤンケらなどのアイヌ民族の名が見え、都市や農地が形作られる遥か以前から、人が暮らすのに適した土地はアイヌ民族が利用していたことが分かります。

その後の都市や農地の開発、国の土地制度や同化政策などで、アイヌ民族の生活は大きく変えられ、非常に多数の和人の中で差別などの苦難を経験しながらも、札幌のアイヌ民族はその尊厳と、独自の文化を今日まで伝えてきました。アイヌ古式舞踊の保護団体や、新しい鮭を迎える伝統儀式アシリチェプノミなどの儀礼を受け継ぐ人々の活動に加え、平成 15 年（2003 年）にはアイヌ民族の伝統文化活動等の推進及び保存・継承・振興等及び市民とアイヌ民族との交流により市民理解を促進する、アイヌ文化交流センター「サッポロピリカコタン」がオープンしています。また、平成 31 年（2019 年）3 月に地下鉄南北線さっぽろ駅構内に誕生した「アイヌ文化を発信する空間（ミナパ）」では、伝統的なアイヌ民族の生活や文化を発信するとともに、アイヌ民族の意匠を用いたアート作品などが展示され、札幌は、アイヌ文化を知ることを通じ、札幌を含めた北海道の歴史文化の多様性を理解できるとともに、今後も継承されるアイヌ文化の現在を感じられる場でもあります。

また、札幌には、アイヌ語に由来する地名が多くあることも知られています。アイヌ語の地名には、自然地形や地質的特徴を言い表したものが多く、当時の地形や地質を学ぶ手掛かりとなります。また、アイヌ民族が地形を含めた生活環境の中でその土地をどう名付けたかを知ることは、アイヌ民族の暮らしや文化について考えるきっかけにもなります。

[61] **西蝦夷地石狩場所絵図**：石狩河口附近および石狩川本流の図。豊平、夕張、千歳川のほか上流は忠別川、沿岸のアイヌの集落、番屋なども描かれている。

アイヌ語に由来すると考えられる地名の意味（一例）山田秀三著「北海道の地名」より抜粋

【手稲】

幕末の旧図には、現在の手稲のあたりに「テイネニタツ」と書かれている。「テイネ・ニタッ（teine-nitat）＝濡れている・低湿荒野」の意味だと言われている。また、「テイネ・イ＝濡るる・処」の意だとも言われている。手稲の地名はこれらの呼び名に由来すると考えられる。

【藻岩】

「モ・イワ（mo-iwa）＝小さい・山」の意味だと言われており、昔は円山をモイワと呼んでいたが、後に間違って現在の藻岩山にこの名前が付けられてしまったと言われている。

【苗穂】

JR 苗穂駅の北側にあった伏古川の支流ナイポがこの地名の由来だと考えられる。「ナイ・ポ（nai-po）＝川・小さな」という意味だと言われており、po は子どもの意であり、地名の中では指小辞[62]として使われる。

【平岸】

「ピラ・ケシ（pira-kesh）＝崖の・末端」の意味だと言われている。豊平川の東側に中の島があり、その東側がずっと崖続きになり、崖下を精進川の下流が流れている。平岸もその辺りについた名が広がって地名になったと考えられる。

アイヌ語に由来すると考えられる地名の一部

[62] **指小辞（ししょうじ）**：主に名詞や形容詞に付加し、その語の示すものよりも更に小さい観念あるいは親愛の情を示す接尾語。

(3) 市民ワークショップ等で話し合われた歴史文化の特徴

■各地に開かれた屯田兵村

手稲で雪中訓練を行う屯田兵(明治 24 年 3 月)
北海道大学附属図書館所蔵

屯田兵制度は、開拓使の次官であった黒田清隆が永山武四郎などの意見を元に建議し、明治維新後に生業を失った士族を北海道の開墾と非常時の防衛に当たらせることを目的に、明治 7 年(1874 年)に始まりました。志願者は、住まいとなる兵屋と土地、移動費、家具や農具、制服、最初の 3 年間は扶助米などが与えられ、家族を連れて東北など様々な地域から移住してきました。札幌では、明治 8 年(1875 年)に 198 戸 965 人が移り住んだ琴似をはじめ、明治 37 年(1904 年)に制度が廃止されて約 30 年の歴史に幕を閉じるまでの間、山鼻、新琴似、篠路に屯田兵村が開かれ、後に札幌市域の一部となる各地の開拓に貢献しました。

■今も親しまれる地産建材

札幌軟石採掘現場
札幌市公文書館所蔵

明治初期に発見された札幌軟石は、約 4 万年前の支笏カルデラの火山活動で生まれた溶結凝灰岩です。明治 8 年（1875 年）に本格的な採掘がはじまると、加工しやすく、保温性や耐火性に優れる特徴から、防火用途や農業用倉庫などに利用され、木造開拓使本庁舎の焼失を契機に石造建築が奨励されたこともあり、最盛期には年産 30 万個(ブロック)、100 軒以上の石材店が営業していたほどでした。札幌軟石を用いた歴史的建造物では旧札幌控訴院庁舎（札幌市資料館）が有名ですが、リンゴやタマネギなどの農業用倉庫として盛んに用いられ、役目を終えた今でも、街並みに溶け込み、地域に親しまれながら残るものも少なくありません。

軟石の持つ独特の優しい雰囲気には今も愛好者が多く、最近でも南区石山の軟石採掘場跡の景観をイベントやまちづくりに生かす活動が見られるほか、古い軟石造の建物をリノベーション[63]したカフェ、加工品の雑貨などが人気を呼んでおり、平成 30 年（2018 年）には、北海道遺産に選定されて注目を集めました。

また、軟石と並び、歴史ある札幌の地産建材として、旧北海道庁本庁舎（赤れんが庁舎）やサッポロビール工場にも使用された「れんが」があります。特に、かつての白石村は、優良なれんがづくりに適した土があり、明治 17 年（1884 年）には鈴木佐兵衛が鈴木煉瓦製造場を開いて約 30 年にわたり、白石産のれんがを供給し続けました。このれんがは、現在重要文化財となっている旧手宮鉄道施設機関車庫 3 号（小樽市総合博物館にて一般公開）や東京駅にも使用されたといわれ、日本の近代建築に足跡を残しました。

[63] リノベーション：建物を改修して新たな機能や価値を加えること。

■「馬鉄」に始まった路面電車

ササラ電車

「市電」のルーツは、南区石山で切り出した石材を運ぶための馬車鉄道で、明治 42 年（1909 年）には乗客の運搬を開始し、明治 45 年（1912 年）には「札幌市街馬車鉄道株式会社」と名を改めて札幌各地域に路線を拡大しました。

大正 7 年（1918 年）に「札幌電気軌道株式会社」による路面電車が開業し、昭和 2 年（1927 年）には市営化され、最盛期には新琴似駅前方面や円山公園、豊平駅（現豊平 4 条 8 丁目周辺）前、苗穂駅前方面にも路線が延伸されました。現在も都心を囲む環状 1 路線が営業しており、昭和中期生まれの旧型車両とＬＲＴ[64]が共存する姿や、竹のササラを利用した除雪車両「ササラ電車」が走る様子などは、都心の特色ある風景として市民や観光客にも親しまれています。

■ななめ通りから見る札幌村の歴史

ななめ通り
札幌市公文書館所蔵

東区の「ななめ通り」の正式名称は「北海道道 273 号花畔札幌線」で、かつては沿道にあった札幌元村にちなんで元村街道と呼ばれていました。

中心市街地近くの基盤の目状に交差する街路の規則性と無関係に北東へ斜めに伸びる道筋は、開拓使による本府建設以前のまちづくりの痕跡（大友掘の流路）を示すものです。

沿道には、本龍寺のように江戸時代に起源を持つ寺院があるほか、大友亀太郎役宅跡（札幌市指定史跡）や大正 9 年（1920 年）建立の大覚寺山門、再利用された古い軟石造りの倉庫などもみられ、札幌村と呼ばれた時代から営みをつないできた周辺地域の歴史文化を感じることができます。

[64] **LRT**：Light Rail Transit の略。低床式車両の活用や軌道・電停の改良による乗降の容易性、快適性などの面で優れた特徴を有する次世代の軌道系交通システム。

■手稲山麓に残る鉱山村の記憶

鉱山内のジオラマ
撮影場所：手稲西小学校（鉱山の部屋）

札幌西部の手稲山は、手稲区民をはじめ、市民にとって親しみのある山ですが、明治期にはここで金の鉱脈が発見され、昭和の初めにかけて「東洋第二の鉱山」とまでいわれるほど活況を呈した時代がありました。鉱山街の児童を受け入れるために開校した歴史を持つ、現在の手稲西小学校（旧札幌郡手稲村立軽川尋常高等小学校手稲鉱山特別教授場）の「鉱山の部屋」と名づけられた資料室には、手稲鉱山の様子を今に伝える資料が多数保存・展示されており、中でも、当時の子ども達が描いたクレパス画は、最盛期には手稲村の人口の約4分の1が集まった、当時のまちの記憶をとどめる貴重な資料です。

■水の恵みに支えられた西区の稲作文化

五天山公園
出典：五天山公園 HP

西区西野・福井・平和などの地域は、札幌西部の山地に近く、琴似発寒川の扇状地の上流側にあたります。明治中期までには河川からの引水によって水稲耕作を成功させ、当時、西野地区には百台もの「もみすり水車[65]」が並んだといわれています。かつて採石場だった五天山公園には、復元された水車小屋のほか、ホタルやサンショウウオなどの生育環境も保全（復元）され、豊かな水の恵みに支えられていた地域の歴史文化を今に伝えています。

[65] **もみすり水車**：籾から籾殻を取り除いて玄米にする水車。水車と連動して杵が動く仕組み。

■日本酪農の父が残した足跡

宇都宮牧場（上白石村）
出典：札幌市開始 50 年記念写真帖

白石区の上白石（現在の菊水）地区は、明治 35 年（1902 年）から昭和 2 年（1927 年）まで、日本酪農の父と言われる宇都宮仙太郎が開いた宇都宮牧場があったことで知られます。仙太郎は、2 度のアメリカ留学などで最先端の欧米の酪農技術を学び、明治 24 年（1891 年）には札幌市内で牛乳の製造販売と、民間初のバター製造に取組みました。また、明治 40 年（1907 年）12 月には、ホルスタイン種牛を輸入して品種改良するなど、情熱をもって日本近代酪農の発展を牽引しました。

大正 13 年（1924 年）には娘婿の出納陽一と共に、厚別区上野幌に宇納牧場を開いたほか、大正 14 年（1925 年）には、仙太郎に師事し、後に北海道酪農義塾（酪農学園大学の前身）を開いた黒澤酉蔵らとともに、有限責任北海道製酪販売組合（雪印メグミルク株式会社の前身）を設置するなど、酪農の発展を牽引し、札幌に多くの足跡を残しました。

■歩兵第 25 連隊のまち月寒

歩兵第二十五連隊
出典：札幌市写真帖

明治 29 年（1896 年）、月寒に、屯田兵を母体とした陸軍第七師団[66]独立歩兵大隊が入営し、明治 32 年（1899 年）には陸軍第七師団歩兵第 25 連隊と改称されました。明治 42 年（1909 年）には札幌初の水道となる連隊のための月寒上水道が完成し、西岡水源池がその貯水池として使われました。

歩兵第 25 連隊の足跡を今に伝えるものに、さっぽろ・ふるさと文化百選にも選定されている「アンパン道路」があります。明治 43 年（1910 年）、旧豊平町役場が豊平から月寒に移転し、不便を強いられることとなった平岸の人々の要望で開かれた新道で、連隊はこれに訓練名目で無償協力し、地元住民とともに僅か 4 か月余りで全長 2.6km の道路を完成させたというものです。町が兵士達の間食としてアンパンを提供したため、この名で呼ばれることとなりました。

[66] **陸軍第七師団**：大日本帝国陸軍の師団の一つ。明治 29 年（1896 年）に月寒村に設置され、明治 33 年（1900 年）～明治 34 年（1901 年）にかけて、師団本拠を旭川へ移転した。

2 関連文化財群の考え方

(1) 関連文化財群とは

文化財は、人々の暮らしの中で他の要素と密接な関係を持つことでその価値が形成され、受け継がれてきているものです。関連文化財群とは、文化財とその価値を形成する様々な要素（周辺環境）とを一体のものとして捉えたものであり、文化財の本来の価値や魅力を損なわず、様々な形で生かしながら将来に引き継ぐための枠組です。

関連文化財群の考え方

(2) 札幌市の関連文化財群の考え方

札幌市では、かけがえのない歴史文化の価値を市民とともに発見し、それらを札幌の魅力資源として総合的に保存・活用するための枠組として、関連文化財群の考え方を用います。

札幌市では、概ね以下の要件を備えた「文化財や周辺環境のまとまり」を、広く市民の声を取り入れて様々な切り口で選び出し、札幌らしさを表す関連文化財群を順次、設定していくこととしています。

札幌市歴史文化のまちづくり協議会では、令和２年度は「大友堀」「開拓使」「札幌軟石」、令和３年度は「縄文文化」「札幌オリンピック 1972」、令和４年度は「風物詩」「積雪寒冷地」をテーマとし、市民ワークショップ及び専門家の意見を参考に関連文化財群及びストーリーを設定しました。

■札幌市の関連文化財群を設定する際の要件

・札幌の歴史文化の特徴をよく表す文化財群を一つのまとまりとして捉えることで、核となる文化財以外の様々な要素（関連する文化財や周辺環境）が見いだされ、結果的に、札幌の個性や魅力がより際立つようになるもの

・大人から子どもまでが楽しめる物語（ストーリー）によって説明され、これにより、札幌の歴史文化についての魅力のＰＲや、理解の促進に貢献するもの

・市民が愛着や誇りを感じ、自ら守り伝えていきたいと感じるとともに、その魅力を誰かに伝えたいと感じるもの

札幌市では、関連文化財群の設定を、市民が自ら暮らす地域の魅力を共有し、来訪者や次世代の市民へ伝えていくための新たな取組として、市民の参加と発意で充実させていくのが望ましいと考えています。市民参加の下で設定される関連文化財群について、その構成要素をつなげるストーリーを展開し、札幌の歴史文化の価値や魅力を分かりやすく発信することで、観光や地域づくりの資源として、文化財の効果的な保存・活用を実現するとともに、文化財（群）の保存・活用に多くの市民が共感し、これらの市民活動が活性化することを目指します。

関連文化財群と歴史文化の特徴との対応関係

歴史文化の特徴 ＼ 関連文化財群	① 原始の昔から育まれてきた人々の暮らし	② 幕末に始まる諸村の開拓と開拓使による中心市街地の建設	③ オリンピックで変わった街の姿と市民の意識	④ 都心で楽しむ季節の催し・風物詩	⑤ 積雪寒冷地に成立した大都市	⑥ 継承されるアイヌ文化
縄文と札幌－さっぽろの縄文を追う	○					
「札幌オリンピック」の遺産が伝える近代都市への歩み －五輪によって新たにデザインされたまち・札幌			○			
札幌の都市軸となった慶応 2 年のインフラ「大友堀」 －亀太郎の精神と「札幌黄」の隆盛		○				
浮かび上がる「開拓使」の遺産 －札幌のまちづくり・ものづくり		○				
札幌軟石 4 万年の旅 －地史を揺るがす大噴火から“カワイイ”まで		○				
札幌の季節を満喫する －自然と人が織りなす豊穣な四季				○		
雪や氷と共にある暮らし －厳しい冬を克服し、利用し、楽しむ					○	

3 関連文化財群の概要

関連文化財群１ 縄文と札幌－さっぽろの縄文を追う

■概要

日本列島には、旧石器時代から連綿と続く人々の暮らしの痕跡がたくさん残されています。ここ札幌でも旧石器時代のものと見られる石器が見つかっていますが、人口200 万人に迫る大都市となった札幌の地で、人々が集落をつくって暮らしていた明らかな痕跡は、今から約 8000 年前頃の縄文早期に現れはじめます。

縄文の特色を決定づける「土器」の発明は、地球温暖化による気候変動と環境変化の中にあって、人々の食生活に劇的な変化をもたらしました。食材を煮沸することで栄養・衛生面が飛躍的に改善され、狩猟・漁労・採集という複合的な生業活動による安定的な食料調達サイクルを確立させたことによって、定住する狩猟採集民が誕生したのです。さらには、定住がもたらした生活の余裕によって、豊かな精神的・芸術的文化が花開いていったと言えるかも知れません。

私たちが暮らす北の大都市「札幌」のまちなかにも、その足下には、たくさんの縄文遺跡が埋もれていて、今の私たちの暮らしは、まさにその上に築かれています。この札幌の「縄文」がどんな姿をしていたのか、その痕跡を辿ってみると、自然と調和し他地域とダイナミックに交流しながら、豊かな暮らしと高度な文化を育んだ先人たちの姿が見えてきます。

■ストーリー

【札幌の縄文の姿とは】

2021 年 7 月「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されました。「北海道・北東北の縄文遺跡群」とは、“津軽海峡を挟んで、北は札幌、南は盛岡・秋田辺りまでを円で囲んだ地域一帯をひとつの文化圏として、およそ１万年以上にも渡って繁栄した縄文文化を代表する遺跡の集まり”のこと。札幌に一番近いところでは、縄文後期の記念物（構築物）で有名な「キウス周堤墓群」（千歳市）が世界遺産を構成する資産のひとつになっています。

年表

では、構成資産を持たないここ札幌はどうだったのでしょう

か・・・？

実は、札幌でも縄文の遺跡はたくさん見つかっています。意外に知られていませんが、札幌は市域内だけで様々な地形を見ることができる珍しい地理環境にあります。道央と道南を分断し市域の南西部を大きくしめる山地地域。今から約 4 万年前の支笏カルデラ超巨大噴火を物語る南東部の台地・丘陵地域。豊平川によって形成された扇状地は教科書のような扇形を形成し、そして縄文海進と呼ばれる温暖な時期には大部分が内湾となっていた市域北部。その内湾が消失していく過程でできていった砂丘地帯。やがて寒冷化と河川が運ぶ土砂によって内湾が陸化した結果、広大な湿地や泥炭地を形成した北部低地。そこを縦横に巡る河川とその河川がつくる自然堤防など、ひとつの行政区でこれだけバラエティに富んだ地形が観察できる大都市は中々ありません。

札幌の縄文文化の痕跡は、この地を潤す大小の河川に沿うように、山合から台地・丘陵、平地から低地、石狩湾近くの海岸砂丘まで至るところに残されていて、市内でこれまで見つかっている縄文遺跡の数は 270 か所以上にものぼります。まさにここ札幌は、縄文のむかしから人々にとって暮らしやすく豊かな土地だったのです。

【札幌の縄文遺跡の変遷】

そんな中で、今から約 8000 年前頃の縄文早期、この札幌の地を生活の舞台に選んだ人々が現れます。この頃、地球規模の急激な温暖化は既にピークを迎えていて、今よりも年平均気温で２℃ほど、海水面も２～３ｍほど高く、現在私たちが見慣れた“札幌”とはまったく違う風景が広がっていました。藻岩山・円山などはもちろん、天神山の上からも、眼前に広がる海や入江が見おろせていたはずです。人々は、東部の台地や丘陵の河川沿いに居を構え、山海の豊かな自然の恵みを上手に利用しながら、長きに渡ってこの地に暮らし続けていたのです。

札幌市内の扇状地と縄文遺跡分布

桃色・燈色（下）・灰色塗り：扇状地、燈色（上）：砂丘、赤色点：縄文遺跡

気候の温暖化がピークに達すると、今度は静かに寒冷化が進行していきます。約 6000 年前頃までには、大小の河川が土砂を運び内湾は消失しますが、縄文中期に相当する約 5500 年前頃から 4500 年前頃までは比較的安定した温暖な気候が続き、縄文のなかで最も多くの遺跡が残され

ます。この頃から、彼らの居住域は東部の台地・丘陵に加えて、発寒川扇状地や紅葉山砂丘にまで広がっていきます。その後、今から約 4000 年前頃の縄文後期以降は、寒冷化とともに遺跡の数は目に見えて減っていき、それまでほとんど遺跡が残されることのなかった札幌扇状地や沖積平野の低地部にも遺跡が残されるようになっていきます。札幌の地で人々が暮らし始めてから 6000 年という膨大な月日が流れ、縄文文化も終わろうとする今から約 2300 年前頃、ここ札幌での暮らしはどのように変化していったのでしょうか？現代の私たちにとっては、永遠とも思えるほど長きに渡って続いていた縄文文化が、続縄文文化へと移り変わって行く頃の札幌をちょっとのぞいてみましょう。

【縄文晩期の札幌－２つの特徴的な遺跡からわかること－】

当時、おそらくは市域内で最も地盤が安定して水はけが良く、どこへ移動するにも都合が良くて暮らしやすかった場所のひとつが発寒川扇状地の扇端部でした。今の西区二十四軒あたりから地下鉄発寒駅界隈にあたります。JR 琴似駅のすぐそばで見つかった「N30 遺跡」では、当時の川縁に家を建て、小さな集落をつくり、小～中型の哺乳類をはじめ、鳥類、ハ虫類、魚類、海獣類、木の実など、様々な食材を利用して暮らしていました。戸数は少ないものの、家の周囲には無数の屋外炉（たき火跡）が見つかっていて、その周りからは大量の土器や石器が出土しました。勾玉やコハク玉といった装飾品なども含めて、総数約 7 万点にのぼる大量の遺物が発見されたことがこの遺跡の特徴です。なかでも目を引くのは、お墓に副葬されたサメの歯を使った祭祀具？（あるいは装身具）と、そのお墓の縁に置かれていた土偶です。土偶はバラバラに壊された状態で見つかりましたが、すべてのパーツを接合してみるとほぼ完全な形に復元できました。その姿は、手足が省略された人の形を模していて、髪を結ったような頭部、顔は仮面をつけたように張りだし、体には「工字文」と呼ばれる文様もんようが全面に刻まれていました。この文様は、当時、東北地方で広く用いられていた土器の文様で、縄文晩期には既に東北地方の人々と、物理的にも精神的にも活発な交流があったことを示す貴重な資料となっています。

N30 遺跡出土土器

N30 遺跡出土土偶

ここで、ふと疑問がわいてきます。二十四軒あたりだと、当時は既に相当内陸に入った位置にあったはずですが、彼らは一体どんなルートを使って海の向こうの地域との交流を行っていたのでしょうか？

縄文の人々が遠方と行き来する際は、通行の道しるべとして河川が重要な役割を果たします。この頃、河川の姿や流路は、現在の河道とはまったく異なっていて、その

疑問に答えるためのキーポイントとなるのが、実は、今も昔も札幌の母なる大河といえる“豊平川”なのです。豊平川は、氾濫を繰り返しながらその河道を西から東へ変えていった暴れ川として知られていますが、元々は札幌扇状地の西縁を流路として八軒界隈から北へ流れ、篠路・茨戸あたりで石狩川に合流していたものが、縄文から続縄文に移り変わる頃には現在の伏古札幌川、そして旧豊平川から対雁方面にその本流を変えていったと考えられており、この流れが内陸部と沿岸部を結ぶ重要な交通路として機能していたのです。まさに N30 遺跡の人々は、豊平川を下って石狩川から外海へ出て、東北地方などとの繋がりを深めていたのでしょう。

さて、ここでもう一つ興味深い遺跡が登場します。それが、当時の豊平川下流域に位置し、石狩川からもほど近い場所にある「丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）」です。N30 遺跡とほぼ同時期に営まれたこの遺跡は、無数のたき火跡と大量の土器や石器など、遺構・遺物の出土状況が N30 遺跡と酷似しています。ただし、両者が決定的に違うのは、丘珠縄文遺跡の方が標高が低く地盤の緩い北部低地に位置し、住居などの暮らしの痕跡が見つかっていないということです。これが何を意味するのかは、今後の調査を待たなければなりませんが、丘珠縄文遺跡においては、N30 遺跡に比して、より顕著に東北地方との関わりがあることを、出土遺物から窺い知ることができます。特筆されるのは、「砂沢式土器」や「イモガイ形土製品」などが発見されたことで、砂沢式土器は東北地方の縄文晩期～弥生初頭に位置付けられる土器、切断したイモガイの殻頂部を模造したものとされるイモガイ形土製品は、北東北の縄文晩期に現れる特徴的な遺物であり、これらそのものが彼らとの直接的な交流を示す物的証拠と言えるのです。

丘珠縄文遺跡

ほぼ同時に存在していたこのふたつの遺跡と北東北との関係性を考えるとき、点から線へと繋がるいくつもの風景が見えてきます。地盤が安定していて豊かな水が湧き出す扇状地に位置し、集落を養うに十分な環境が整っている「N30 遺跡」。低地部であっても活動拠点となる微高地が存在し、食用に資する動植物が豊富で、その目と鼻の先には、外海と内陸部をつなぐ玄関口となる石狩川河口部がある「丘珠縄文遺跡」。そして、それぞれの場所には、人か物が動かない限り、そこには存在し得ないものがあるということ。これらの遺跡は、縄文という時代にあっても、個人や集落単体では社会は成り立たない、あるいは社会自体、他者との関係性があって初めて成立し、そ

こから個性あふれる文化が生まれてくるという普遍の事実を、私たちに思い出させてくれます。

こういった遺跡を俯瞰すれば、縄文晩期に限らず、縄文時代全般にわたって列島各地には地域性があり、広い範囲で似たような土器をつくる文化や特定の地域でしか調達できない生活必需品（例えば、黒曜石やヒスイ、アスファルトなど）などの存在も考えると、相当早い段階で壮大な縄文の情報流通ネットワークが存在していたということを容易に想像することができます。

その後、縄文文化から続縄文文化に移り変わると、札幌は、南の弥生文化とサハリンなどからの北の文化が交わる拠点的な場所になっていきました。物流だけでなく文化の交流拠点としての役割を担う姿は、現在の札幌と通じるものがあります。

この札幌の地で、数千年も前に生きていた人々が作り、実際に使っていたホンモノの道具たちを目にしたとき、今の札幌のまちと暮らしが、縄文の暮らしの延長線上にあることを、まさしく肌で実感することができるでしょう。そして、地形や環境の変化に適応し、自然と共生しながら遙かな時を重ね、心豊かで安定した社会を実現した縄文人の暮らし方は、現代の私たちが目指す持続可能な社会について考えるヒントになり得るかもしれません。

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	N30 遺跡	埋蔵文化財	
2	札幌市 N30 遺跡出土品	埋蔵文化財	市指定有形文化財
3	丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）	埋蔵文化財	
4	丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）出土品	埋蔵文化財	
5	豊平川	記念物	
6	藻岩・円山原始林	記念物	国指定天然記念物
7	北海道知事公館敷地内の竪穴住居跡	埋蔵文化財	
8	北海道大学キャンパス内の人類遺跡・北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室、北海道大学附属植物園敷地内の人類遺跡	埋蔵文化財	

■関連文化財の分布

関連文化財群マップ＜縄文文化＞
丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）
丘珠縄文遺跡（H508 遺跡）出土品
北海道大学キャンパス内の人類遺跡・
北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室
N30 遺跡
北海道大学附属植物園敷地内の人類遺跡
北海道知事公館構内の竪穴住居跡
円山原始林
藻岩原始林
札幌市 N30 遺跡出土品
札幌市埋蔵文化財センター展示室
豊平川

関連文化財群２　「札幌オリンピック」の遺産が伝える近代都市への歩み

ー五輪によって新たにデザインされたまち・札幌

■概要

1972 年、札幌市はアジア初の冬季オリンピック開催地となりました。その背景には、明治から昭和にかけて、スキーやスケートがウインタースポーツとして市民に定着していった歴史があります。

オリンピックの開催は、札幌のまちが変わるきっかけとなり、インフラが整備されるなど近代都市としての基盤がつくられました。また、競技施設の建設やロゴマークのデザインなどに一流のクリエイターが携わり、現在まで残されているものも少なくありません。

それらオリンピックの遺産（レガシー）をたどることで、今につながる札幌のまちの魅力が見えてくるはずです。

■ストーリー

アジア初の冬季オリンピックとして 1972（昭和 47）年 2 月 3 日～13 日まで開催された「第 11 回冬季オリンピック札幌大会」。しかし、本当はもっと早く実現するはずでした。1940（昭和 15）年、第 5 回大会の札幌開催が決まっていましたが、日中戦争の激化により政府は開催権を返上。幻の冬季オリンピックとなってしまったのです。再度の招致は日本、そして札幌にとってまさに悲願でした。第 10 回開催は逃したものの、第 11 回は、IOC 委員・高石真五郎が病床で札幌開催を切々と訴えた「高石アピール」が決め手となり、一次投票で過半数を獲得し札幌に決定。招致にかける熱意が実を結びました。

旧大倉シャンツェ
（現：大倉山ジャンプ競技場）

札幌のウインタースポーツの歴史は、明治時代に始まります。スケートの伝来は早く、1877 年（明治 10 年）に札幌農学校（現在の北海道大学）に着任したアメリカ人教師のウィリアム・ブルックスがスケート靴を持参して学生の前で滑ったのが、日本で初めてと言われています。その後、新渡戸稲造がアメリカ留学から帰国した際に、札幌農学校にスケート靴を持ち帰ったことで市民の間で人気が高まっていきました。1926 年（大正 15 年）には「氷上フェスティバル in 中島公園」というスケートと氷に感謝するイベントが行われ、市民は

旧真駒内スピードスケート競技場
（現：真駒内公園屋外競技場）にある聖火台

仮装をして夜遅くまでスケートを楽しんだそうです。

スキーは、明治 41 年（1908 年）、前年に札幌農学校から改称した東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）でスイス人教師ハンス・コラーが持ち込んだアルペンスキーが、学生のあいだで広まりました。1932（昭和 7）年には、初の国際規格のジャンプ競技施設「大倉シャンツェ」が開場。1930（昭和 5）年に始まった「宮様スキー大会国際競技会」は、市民参加の大会として今日まで続いています。

このように、札幌には近代以降早くからスキーやスケートが一般に普及し、ウインタースポーツは馴染み深いものとしてありました。冬季オリンピックは、札幌で行なわれるべくして行なわれた、と言えるでしょう。

オリンピックは、札幌のまちづくりにも大きな影響を与えました。1967（昭和 42）年にまちを近代都市へ大改造する構想が立ち上がり、インフラなど都市環境整備の契機となったのです。会場を結ぶ道路として五輪通や札幌新道などが造成され、交通をスムーズにするための橋梁も架設されました。開催直前の 1971（昭和 46）年には、北海道初の高速自動車道「道央自動車道（千歳～北広島）」と「札樽自動車道（札幌～小樽）」が開通。そして地下鉄南北線（北 24 条～真駒内）の開通と同時に、冬でも快適に歩ける地下街が誕生します。地下空間の発展は、市民の冬の暮らし方やファッションを変えていきました。

真駒内の彫刻群（五輪大橋）

競技場や関連施設、エンブレムなどのデザインには、日本を代表する建築家やデザイナーが関わりました。プレスセンター（現北海道青少年会館）は黒川紀章、旧真駒内スピードスケート競技場（現真駒内公園屋外競技場）は前川國男の設計です。聖火台のデザインは柳宗理が手がけました。そして、雪の結晶が印象的な大会エンブレムは永井一正によるもので、施設の外壁にも掲げられました。大会公式ポスターは、1964 年東京オリンピックのエンブレムで知られる亀倉雄策などが制作。その前の招致ポスターは岩見沢市出身のデザイナー・栗谷川健一が制作しました。これらクリエイターの表現によって札幌のまちが世界へ発信され、市民は熱気とともに国際都市・札幌への変貌を実感しました。そしてオリンピック開催を機に、札幌はアジアのウインタースポーツ競技の拠点となっていったのです。

旧美香保屋内スケート競技場
（現：美香保体育館）にある大会エンブレム

札幌オリンピックミュージアム内の展示

札幌市内に残されたオリンピック施設は、今も市民に親しまれています。先に挙げた建築家の作品や聖火台のほか、旧オリンピック村は真駒内団地として、美香保と月寒の屋内スケート競技場は

スケートリンクを持つ体育館として利用されています。そして、大倉シャンツェを改修した大倉山ジャンプ競技場では、スキージャンプ競技の主要な国際・国内大会が開催されています。場内には「札幌オリンピックミュージアム」が併設され、ウインタースポーツや札幌オリンピックについても知ることができます。

主会場だった真駒内の通りや公園には、本郷新、佐藤忠良など著名な美術家の彫刻作品が、まちに溶け込むようにたたずんでいます。

このように、札幌オリンピックのレガシーは身近なところにあるので、実際に巡ってみるのがおすすめです。きっと、札幌のウインタースポーツの歴史とともに、まちに新たな文化を作り出したオリンピックの記憶を感じることができるでしょう。

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	旧大倉シャンツェ （現：大倉山ジャンプ競技場）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選 （建物）No.16
2	スキー・スケートの伝来 （札幌オリンピックミュージアム収蔵品）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選 （用具）No.92
3	ヘルベチアヒュッテ	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選 （街並）No.44
4	パラダイス・ヒュッテ	有形文化財	
5	空沼小屋	有形文化財	
6	宮の森ジャンプ　競技場	有形文化財	
7	聖火台	有形文化財	
8	旧真駒内スピードスケート競技場 （現：真駒内公園屋外競技場）	有形文化財	
9	旧真駒内屋内スケート競技場 （現：真駒内公園屋内競技場）	有形文化財	
10	旧オリンピック村（現：真駒内団地）	有形文化財	
11	五輪大橋	有形文化財	
12	真駒内の彫刻群	有形文化財	
13	手稲山	記念物	
14	札幌市営地下鉄　南北線 （北 24 条～真駒内）	有形文化財	
15	さっぽろ地下街	有形文化財	
16	旧美香保屋内スケート競技場 （現：美香保体育　館）	有形文化財	
17	旧月寒屋内スケート競技場 （現：月寒体育館）	有形文化財	
18	旧手稲山回転・大回転競技場 （現：SAPPORO TEINE）	有形文化財	
19	エドウィン・ダン記念館	有形文化財	国登録有形文化財

■関連文化財の分布

関連文化財群マップ＜札幌オリンピック＞
聖火台
パラダイス・ヒュッテ
手稲山
旧手稲山回転・大回転競技場
（現：SAPPORO TEINE）
旧大倉シャンツェ
（現：大倉山ジャンプ競技場）
スキー・スケートの伝来
（札幌オリンピックミュージアム収蔵品）
【定山渓・簾舞方面】
ヘルベチア・ヒュッテ
空沼小屋
宮の森ジャンプ競技場
札幌市営地下鉄南北線（北 24 条～真駒内）
旧美香保屋内スケート競技場
（現：美香保体育館）
聖火台
さっぽろ地下街
旧月寒屋内スケート競技場
（現：月寒体育館）
旧真駒内屋内スケート競技場
（現：真駒内公園屋内競技場）
五輪大橋
真駒内の彫刻群
旧真駒内スピードスケート競技場
（現：真駒内屋外競技場）
及び聖火台
旧オリンピック村
（現：真駒内団地）
エドウィン・ダン記念館

関連文化財群３ 札幌の都市軸となった慶応 2 年のインフラ「大友堀」

ー亀太郎の精神と「札幌黄」の隆盛

■概要

札幌の開発は、明治 2 年（1869 年）に開拓判官・島義勇が札幌本府建設に着手した時が始まりと思われがちですが、そうではありません。島が札幌の南北軸とした「大友堀」は、慶応 2 年（1866 年）に、箱館奉行の直営農場のための用排水路として大友亀太郎によって開鑿されたもの。幕末のインフラは、後に札幌産タマネギ「札幌黄」の生産にもつながりました。「大友堀」の痕跡をたどると、古河川の水脈が見えてくるとともに、数々の文化財や古刹、札幌村郷土記念館で昔の札幌に出合えます。

■ストーリー

「大友堀」の名は、幕府の役人だった大友亀太郎に由来し、後世の人がそう呼ぶようになりました。亀太郎は二宮尊徳の門下生で、報徳仕法と呼ばれた農村復興政策を学び、蝦夷地に渡ります。そして箱館奉行から直営農場である御手作場をつくることを命じられ、慶応 2 年（1866 年）、現在の札幌市東区を適地とし、用排水路の開鑿に着手しました。これは豊平川の分流を水源として、南 3 条付近から北 6 条へ北上し、そこから東北方向に伸ばしてフシコサツホロ川に合流させるというもので、約 4 km に及ぶ工事は「百万両の大工事」と称されました。明治 2 年（1869 年）、開拓判官・島義勇が札幌本府の建設に着手した際、そこには既に幕府の遺産である「大友堀」が存在していたのです。その後、「大友堀」は物資輸送の舟運ルートとしても大きな役割を果たします。

大友亀太郎

大友掘

島の後任の岩村通俊判官は東西に走る後志通（現・大通）の広い緑地帯を基線にして、北を官庁街、南を商店・住宅街とし、「大友堀」によって街を東西に分けました。そして 60 間四方を一区画とする碁盤の目が、札幌の基盤となります。

幕末から開発が始まり、御手作場が設けられた地域は札幌村、元村と呼ばれました。その地割は今も残っており、家並みや地図に御手作場の痕跡を見ることができます。また、北 6 条からかつて御手作場の役宅のあった札幌村郷土記念館までは、碁盤の目の札幌では珍し

い斜めの道が走っています。

明治 3 年(1870 年)、「大友堀」の北 6 条から北の旧琴似川の合流点に「寺尾堀」が、「大友堀」の南 3 条から南 6 条に「吉田堀」が開鑿されて「大友堀」は南北に延伸されました。明治 4 年(1871 年)、「大友堀」にかかる橋を岩村が創成橋と名づけたことで明治 7 年(1874 年)、「大友堀」は創成川となりました。

創成川

農家の人々は、お雇い外国人ブルックスの指導を受けながらタマネギ栽培に努力し、明治 13 年(1880 年)頃、札幌村では西洋野菜のタマネギ栽培に成功しました。「札幌黄」という品種のタマネギは、炭鉱や船積み食料として重宝され、ロシアへも盛んに輸出されました。

人々が収穫に感謝して丘珠神社に奉納した獅子舞は、今も札幌市無形文化財第一号の丘珠獅子舞としてしっかりと受け継がれています。

御手作場や札幌黄に関する資料が展示されている札幌村郷土記念館、亀太郎ゆかりの妙見堂を擁する本龍寺、道内最大の山門を擁する大覚寺などが点在するななめ通り周辺。それは幕末から開発が始まっていた札幌の開拓期の名残りを追体験できる場所に他なりません。

妙見山　本隆寺

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	大友堀跡	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（遺構）No.59
2	札幌村郷土記念館	その他	
3	創成橋	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.85
4	創成川	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.85
5	創成川公園	記念物	
6	大友亀太郎像（創成川公園内）	その他	
7	大友亀太郎像（札幌村郷土記念館前庭）	その他	
8	札幌黄	記念物	
9	札幌玉葱記念碑	その他	
10	丘珠獅子舞	無形文化財	市指定無形文化財
11	札幌村・大友亀太郎関係歴史資料及び史跡	有形文化財、記念物	市指定有形文化財、市指定史跡

12	妙見山本龍寺（妙見堂）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.34
13	大覚寺	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.89
14	大友公園	記念物	
15	元村街道(ななめ通り)	文化的景観	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.89
16	林檎の碑	記念物	
17	札幌村神社	有形文化財	

■関連文化財の分布

関連文化財群４　浮かび上がる「開拓使」の遺産－札幌のまちづくり・ものづくり

■概要

近代国家を目指す明治時代の日本にとって、北海道を開拓し、その資源で産業を興すことはきわめて重要なことでした。そのための国の機関が「開拓使」です。札幌市街地を歩くと近代化の揺り籠ともいえる役割を果たした施設群に触れることができます。

■ストーリー

明治政府は欧米列強からの独立を守るため、近代化と産業振興に取り組みます。北海道は南下するロシアへの防備として重要な場所でしたし、北海道の豊かな資源を開発することは近代国家に生まれ変わろうとする日本の国益に合致するものでした。そこで明治２年（1869 年）７月から明治 15 年（1882 年）の間、北海道開発のために設置された国の機関が「開拓使」です。北海道開発は重大な国家プロジェクトだったのです。

開拓使札幌本庁本庁舎跡

北海道は本州以南とは気候も土地条件も異なります。範を求めたのは条件が似ていて大規模な開拓の経験がある米国。開拓次官・黒田清隆はアメリカ合衆国連邦政府の農務長官・ホーレス・ケプロンを開拓使顧問として招きます。ケプロンは多くの外国人技術者（お雇い外国人）を指揮して地下資源調査、測量、道路開削、諸産業の振興に取り組みます。札幌農学校教頭のウィリアム・スミス・クラーク、地質技師のベンジャミン・スミス・ライマン、果樹栽培のルイス・ベーマー、酪農・畜産のエドウィン・ダンなどその数、78 人。「開拓使」は北海道の自然の特性を見極めて近代技術を積極的に取り入れました。現・北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）の敷地内には開拓使本庁舎が発掘され、史跡「開拓使札幌本庁本庁舎跡」として残されています。創成川（大友堀）の東側には、明治５年（1872 年）から後に工業局・物産局・民事局となる開拓使の担当掛により、製材、木工、馬具、鋳物、製粉、製網、製糸（紡織所）、製糖、味噌醤油醸造などの工場群が整備されました。それらでは水車に加え最新鋭の蒸気エンジンを動力にしていました。その背景には創成川の舟運の便と、工業用水に使える豊平川の流水の存在があ

ウィリアム・スミス・クラーク

りました。

明治 9 年(1876 年)に北 3 条通沿いに麦酒醸造所（現・サッポロファクトリーはその跡地につくられたサッポロビールの工場）が開業しました。事業責任者の旧薩摩藩士・村橋久成は東京ではなく札幌での建設を主張し実現します。なぜなら醸造技術者の中川清兵衛がドイツで学んできたのは冷製発酵の醸造法で、大量の天然氷と冷涼な気候が成否のカギだったからです。

麦酒醸造所

同年、札幌農学校も開校します。卒業後は一定期間、開拓使での奉職が義務づけられ、近代技術を学んだ優秀な卒業生が農業や土木分野で活躍しました。札幌農学校演武場が現・時計台です。

旧札幌農学校演舞場（時計台）

亜麻、ホップ、リンゴ、ブドウ、イチゴなども官園や本庁周辺で試験栽培されました。

移住者を定着させ、北の守りを固めるために採用されたのが、屯田兵制度です。平時は農耕・開墾に従事し、有事には兵士となるよう軍事訓練が義務づけられました。北 3 条通りは屯田兵の父と呼ばれた永山武四郎が自邸から馬で開拓使札幌本庁舎に通った道でもあります。

開拓使のマークは赤い五角形の星（五稜星）。豊平館や清華亭、時計台など開拓使ゆかりの建物に今も輝いています。清華亭の傍の池では湧水を利用してサケマスのふ化事業も行われていました。随所で「開拓使」の遺産が浮かびあがる札幌。この街を歩くと、近代国家建設に尽力した先人の思いに触れることができるのです。

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	エドウィン・ダン記念館	有形文化財	国登録有形文化財、 札幌景観資産（第 20 号）、 さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.42
2	北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）	有形文化財	国指定重要文化財 国指定史跡
3	開拓使札幌本庁本庁舎跡および旧北海道庁本庁舎	記念物	国指定史跡
4	桑園碑	有形文化財	
5	創成川	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.85
6	創成橋	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.85
7	豊平川	記念物	

8	北３条通	その他	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.77
9	旧札幌麦酒会社工場跡（サッポロファクトリー）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.1
10	札幌農学校とクラーク博士	その他	さっぽろ・ふるさと文化百選（遺跡）No.53
11	旧札幌農学校演武場（時計台）	有形文化財	国指定重要文化財
12	旧開拓使工業局庁舎	有形文化財	国指定重要文化財（建造物）
13	旧永山武四郎邸	有形文化財	道指定有形文化財
14	豊平館	有形文化財	国指定重要文化財
15	清華亭	有形文化財	市指定有形文化財
16	偕楽園跡	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（遺跡）No.55
17	サッポロビール博物館	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.33

■関連文化財の分布

関連文化財群５　札幌軟石４万年の旅－地史を揺るがす大噴火から“カワイイ”まで

■概要

札幌軟石は、約４万年前に起きた支笏火山の大噴火による火砕流が冷え固まったものです。明治時代以来、建築材料として使われたのはもちろん、採掘や運搬の歴史においても大きな軌跡を残しています。今なお切り出しが行われ、カワイイ雑貨やインテリアへの用途も広がる札幌軟石は、地産地消の資源として進化を続けています。

■ストーリー

約４万年前、支笏火山は巨大噴火を起こしました。火山灰や軽石は高さ３万ｍまで噴き上げられて広く降り積もり、火砕流が流れ下りました。これらの噴出物は、太平洋に注いでいた石狩川の行く手を阻み、流路を日本海に変えてしまったほどの膨大な量だったとも言われています。それが冷えて固まった溶結凝灰岩が、札幌軟石です。支笏火山の跡は大きなくぼ地になって水が溜まり、カルデラ湖の支笏湖となりました。

それから遥かな時が流れた明治時代、開拓初期の建物は木造で断熱性が低く、寒さをしのぐために家の中で火を焚くことも多かった北海道では火災が深刻な問題でした。そこで開拓使は、米国より招いたお雇い外国人、ホーレス・ケプロンらの助言を受け、耐火性の強い建材として札幌軟石に着目します。商家の蔵、店舗、公共建築、教会、倉庫など軟石建物が次々に建てられました。空隙率が高く保温性も優れていたので、野菜や果物の保管、酒・味噌・醤油の醸造庫としても最適でした。東区や北区ではタマネギ倉庫、豊平区ではリンゴ倉庫、厚別区ではサイロなど地域の特性を反映して多彩な使われ方をしました。

つるはしなど石切りに使う道具

札幌軟石の切り出しは、昭和になってチェンソーが導入されるまで、石工の手によるものでした。ツルハシで石に溝を作り、金矢を打ち込んで石を浮かせて割り出すのです。石工がツルハシを振るう回数は１日数万回にもなったとか。割り出されたままの石の表面から凸凹をツルハシで取り除くことを野取りといい、仕上げには熟達した石工の技が冴えました。

運搬の面では札幌の交通にも大きな影響を与えました。札幌軟石を運ぶため、明治 42 年（1909 年）に石山から南２条西 11 丁目付近まで馬車鉄道が敷設されました。現・国道 230 号の通称「石山通」は、石山の軟石をはじめ、硬石など地域産の石材が運ばれた道であったことに由来します。大正７年（1918 年）には豊平と定山渓を結ぶ定山渓鉄道が開業し、石山地区には石切山駅もできました。今、駅舎は石山振興会館となり、ぽすとかん（旧石山郵便局）とともに地域の拠点になっています。ぽすとかんのインテリアには札幌軟石のアートがあしら

われています。

街に深い情感を添え、かけがえのない景観を形づくってきた札幌軟石。鉄筋コンクリートの時代になって軟石建物は減っていますが、平成 27 年(2015 年)の調査では市内に約 300 棟以上が残っており、飲食店やギャラリーとしても活用されています。そのような中、令和２年 12 月に札幌市資料館（旧札幌控訴院庁舎、大正 15 年(1926 年)建築）が国の重要文化財に指定されました。美しさはもちろん軟石と煉瓦を組み合わせた構造、２階床の鉄筋コンクリートの採用など新旧の建築技術が融合していることも評価されました。

札幌市資料館(旧札幌控訴院庁舎)

石山地区を訪れると、採掘跡が古代遺跡を思わせるアート空間として整備された石山緑地や、藻南公園の札幌軟石ひろばとして野外展示された最古の採掘跡も見ることができます。吸水性の良さを生かしたかわいいアロマストーンや、コースターに変身した札幌軟石を購入することもできます。地史を揺るがす大噴火から 4 万年。札幌軟石は遥かな旅の途上で進化を続けています。

石山緑地

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	石狩川	記念物	
2	髙城商店（石造倉庫）	有形文化財	札幌景観資産（第 25 号）
3	秋野総本店薬局	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.7
4	旧沼田屋倉庫（現・豆蔵珈房「宮田屋」東苗穂店）	有形文化財	札幌景観資産（第 30 号）
5	篠路駅周辺の倉庫群	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.30
6	八紘学園資料館（旧吉田牧場畜舎・石造サイロ）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.40 札幌景観資産（第 9 号）
7	北海道大学旧第二農場釜場	有形文化財	国重要文化財附指定
8	北海道大学旧第二農場原動機室	有形文化財	国重要文化財附指定
9	北海道大学旧第二農場サイロ	有形文化財	国重要文化財附指定
10	近藤牧場（石造サイロ）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.28

11	旧馬場農場のサイロ	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.36
12	旧宇納牧場サイロ	有形文化財	
13	日本キリスト教団札幌教会（旧札幌美以教会堂）	有形文化財	国登録有形文化財 さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.4 札幌景観資産（第 7 号）
14	カトリック北一条教会司祭館カテドラルホール	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.3 札幌景観資産（第 23 号）
15	ツルハシなど石切に使う道具	有形民俗文化財	
16	石山通（国道 230 号）	その他	
17	旧石切山駅（現・石山振興会館）	有形文化財	札幌景観資産（第 10 号）
18	旧石山郵便局（現・ぽすとかん）	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.41 札幌景観資産（第 5 号）
19	石山神社	有形文化財	
20	旧札幌控訴院（札幌市資料館）	有形文化財	国指定重要文化財 さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.18 札幌景観資産（第 17 号）
21	石山緑地	記念物	
22	石山軟石採掘場跡	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（遺跡）No.68
23	藻南公園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（遺跡）No.67
24	札幌軟石の小物	その他	

※北海道の産業とくらしを支えた札幌軟石に関連する石文化は、「札幌軟石」の名称で北海道遺産に選定されています。

■関連文化財の分布

関連文化財群マップ＜札幌軟石＞
石狩川
篠路駅周辺の倉庫群
近藤牧場（石造サイロ）
旧沼田家倉庫
（現・豆蔵珈房「宮田屋」東苗穂店）
北海道大学　旧第二農場（釜場、原動機室、サイロ）
髙城商店（石造倉庫）
日本キリスト教団札幌教会（旧札幌美以教会堂）
旧札幌控訴院
（札幌市資料館）
カトリック北一条教会司祭館カテドラルホール
秋野総本店薬局
旧馬場農場の
サイロ
八紘学園資料館
（旧吉田牧場畜舎
・石造サイロ）
旧宇納牧場
サイロ
石山通（国道 230 号）
藻南公園
石山緑地、石山軟石採掘場跡
旧石切山駅
（現・石山振興会館）
旧石山郵便局（現・ぽすとかん）
石山神社
凡例
構成文化財
道路
河川
0
1
2
3
4
5km

関連文化財群６ 札幌の季節を満喫する　－自然と人が織りなす豊穣な四季

■概要

冬は氷点下の気温が続き、夏は 30 度を超える日も珍しくない札幌は、四季がはっきりしていると言われます。都心のビル街から手の届く距離に見える山々は、大都市の生活に潤いを与えてくれるのです。その楽しみをさらに深め盛り上げるのが、人の営みと、いつもどこかで開催される多彩な祭りや行事。札幌を彩る四季折々の風物詩を集めました。

■ストーリー

【桜も梅も、札幌では５月の花】

雪解けが進む３月にはふきのとうや福寿草、４月には円山原始林でエゾエンゴサクが白や水色、薄紫色などの可憐な花を咲かせます。同時に、水辺ではミズバショウが見頃。冬の終わりを待ちわびたかのように、北海道の春はさまざまな花が短い期間に一斉に、エネルギッシュに咲き出します。北国の草花は春を迎える人々の喜びと共鳴するのです。

円山公園でのお花見

札幌の桜の開花日は４月下旬から５月上旬。ゴールデンウィークと重なり、花見の名所は連日賑わいます。桜の下でジンギスカンやバーベキューを楽しむ市民が多いのも北海道ならでは。エゾヤマザクラやソメイヨシノなど約 160 本が咲き競う円山公園は普段は火気厳禁なのですが、この時期だけ特別に火の使用が許可され、炭火コンロの貸し出しも行われます。市内には他にも桜の名所がいくつもあり、中央区の北海道神宮参道や中島公園、東区のモエレ沼公園、豊平川桜の杜、西区の農試公園、南区の紅櫻公園などが知られています。

また、本州などでは桜よりもかなり早い梅の開花が、札幌では桜とほぼ同時の５月上旬。清田区の平岡公園には 1,200 本もの梅の木が植えられており、開花期間中には 10～20 万人が訪れます。

５月下旬、街がライラックに彩られる頃、北海道大学構内ではクロユリの群生地が見頃を迎えます。本州では高山植物として知られていますが、北海道では低地で花を咲かせるのです。昭和初期にはその数が激減してしまいましたが、再生プロジェクトにより平成 18 年（2006 年）によみがえりました。

【ライラックが爽やかな街】

昭和 30 年（1955 年）６月 16 日付の北道新聞朝刊に掲載された歌人・吉井勇の短歌が、当時の札幌市民の心を掴みました。

家ごとにリラの花咲き札幌の
人は楽しく生きてあるらし

リラはフランス語でライラックのこと。吉が札幌に滞在したのはわずか１週間でしたが、ライラックの紫や白の花が公園や家々の庭に一斉に咲く風景は、異国情緒を感じさせ、強く印象に残ったのでしょう。

原産はヨーロッパで、明治中期に北星学園を創立したサラ・クララ・スミスが、アメリカから初めて持ち込んだといわれています。札幌の冷涼な気候に合うことからたちまち広まり、ついには昭和 35 年（1960 年）に「札幌市の木」に制定されました。スミスが持ち込んだとされる札幌最古の木が、北海道大学植物園内に植えられています。

大通公園に咲くライラック

大通公園には約 400 株のライラックが植えられ、５月下旬のさっぽろライラックまつりでは記念樹の配布やコンサートが行われます。また、この時期にはまだ気温が安定せずに急に寒くなることがあり、「リラ冷え」と呼ばれています。

【心躍る、華やかな札幌まつり】

５月 15 日に都心部の三吉神社で例祭が行われると、６月上旬の YOSAKOI ソーラン祭り、そして６月 15 日の札幌まつり（北海道神宮例祭）と、都心部の祭りが続きます。札幌まつりの期間中、神宮境内ではさまざまな奉納行事が行われ、中島公園には見世物小屋や露店が約 400 軒も並びます。往時は市内の職場の多くが休日になり、街では商店ごとに軒花や献灯を飾って祭り気分を盛り上げたものでした。

６月 16 日には開拓三神と明治天皇の４基の鳳輦（神輿）が市内を練り歩き、明治新政府による官立の神社らしく、王朝絵巻のような装束でうやうやしく運ばれるのです。戊辰戦争の官軍を模した維新勤王隊が「ピーヒャラ、ドンドンドン」と勇壮な演奏で鳳輦を先導するのも特徴的です。そんな「朝廷風」の行列の後に従う各祭典区の山車９基は、趣を変えて「庶民」の行列。色彩が豊かで、お囃子や手踊り、仕掛け人形などで目も耳も楽しませます。先頭から最後尾まで約 1.5km にもなる行列は、その年の年番祭典区や都心部を中心に、10～15km を１日かけて歩きます。昔は馬が山車を引いたものでしたが、馬の調達などが難しくなった今では乗用

車やトラクターが引いています。

子どもたちの楽しみは、何と言っても中島公園の見世物小屋や露店でしょう。まだ市街地が広がっていなかった時代、神宮（札幌神社）は札幌市民が気軽に参拝するには少し遠かったようです。そのため、都心に近い創成川沿いに露店が立ち並んだのが始まりでした。しかし、混雑が激しくなると狭く危険な上に、交通の妨げにもなってしまうことなどから、昭和 30 年代に現在の中島公園に移転しました。

札幌まつり

ところで、札幌市民の間で長年言い伝えられてきたのが「三吉神社の祭りが晴れ（雨）なら、札幌まつりは雨（晴れ）」というジンクス。過去の気象の記録を調べてみると、実際にはジンクス通りにはなっていない年の方が多いようです。

【札幌の気候がビールをうまくする】

さっぽろ夏まつりのメインイベントの一つとして大通公園で約 1 か月間開催されるビアガーデンは、総席数約 13,000 席を誇る国内最大級のビールの祭典。短い夏を楽しむ市民や観光客で盛り上がります。

観光客の誘致と市民のレクリエーションを目的に、「商工夏まつり」の名で昭和 29 年（1954 年）に始まったさっぽろ夏まつり。初期のメイン会場は中島公園で、音楽演奏や七夕まつり、子供相撲、ホタル狩り、盆踊り、仮装パレードなど多彩な催しが展開されました。中でも、仮装パレードはコンテスト方式だったこともあり人気を集めたようです。昭和 32 年（1957 年）からメイン会場が大通公園に移りました。

その大通公園で初めてビアガーデンを開催したのは昭和 34 年（1959 年）。日本バーテンダー協会やビール会社の協力で、収益金の一部を福祉団体に寄付する「福祉協賛」の企画として実現しました。回想記事によれば、札幌観光協会のメンバーから「祭りにはお神酒がなけりゃ駄目じゃないか」という声が出たことがきっかけの一つだったのだとか。当時は大通公園のようなオープンスペースでのビアガーデン開催例がほとんどなかった上に、日中から飲酒することを不道徳だと考える人が多かった時代。不安の声もありましたが、フタを開けてみれば連日大盛況で、関係者たちをホッとさせたのです。札幌の夏のカラッとした暑さと爽やかな風の中で飲むビールは格別だと評判になり、風物詩として定着しました。

大通公園でのビアガーデン

札幌とビールの関係は、開拓使時代の明治 9 年（1876 年）に官営工場の一つとして麦酒醸造所が設立されたことに始まります。北海道の農産物の商品価値を高める加工品として、開拓使

ではビールに着目していました。当初、醸造所は東京に開設される予定でしたが、これに異議を唱えたのが、ヨーロッパ留学を経験した薩摩藩出身の村橋久成。原材料の産地に近く、扇状地の末端で良質な伏流水が豊富、しかもヨーロッパに似た冷涼な気候の札幌にこそ醸造所を建てるべきだと訴えたのです。豊かな水脈と「メム」（アイヌ語で泉の意味）があった創成川の東側には、ビール以外にもさまざまな食品工場が建ちました。

サッポロビール博物館

【盆踊りは子どもと大人の２部制】

８月中旬になると、市内のあちこちで盆踊りが開催されます。会場によっては参加した子どもたちにお菓子が配られることもあって、ワクワクした思い出を持つ市民も多いのではないでしょうか。北海道の盆踊りは、子どもの部（早めの時間）と大人の部（遅めの時間）の２部構成であることが多く、子どもの部では「子供盆おどり唄」が、大人の部では「北海盆唄」が演奏されるのが一般的。どちらも北海道で生まれた曲です。

北海盆唄の元になったのは、炭鉱で働く人々の間で自然発生的に歌われた即興の歌。決まった歌詞はなく、時にはお酒に酔って羽目を外し、子どもたちにとても聞かせられないような歌詞で歌われることも。そこで戦後、子どもたちが安心して楽しめるようにと企画され、江別市の童謡作家・坪松一郎が作詞、山本雅之が作曲して昭和 27 年（1952 年）に誕生したのが「シャンコシャンコ」でおなじみの「子供盆おどり唄」でした。

一方、大人の盆踊りの歌も数多く作られています。テレビ局が歌詞を公募し、あるいはレコード会社が作詞家に依頼するなどして、300 を超える新たな歌詞が誕生。そして昭和 33 年（1958 年）に三橋美智也の歌でレコード化されると、北海盆唄は全国的にも知られるようになったのです。

大人と子どもを分ける理由がなくなった今も、北海道での盆踊りでは２部構成が２つの歌と共に受け継がれています。さっぽろ夏まつりの北海盆踊り（大通公園）では、観光客が飛び入り参加する光景も見られます。

大通公園の北海盆踊り

【短い夏から錦織りなす季節に】

８月も下旬になると、朝夕の風が涼しく感じられるようになります。時々戻ってくる暑さも９月上旬には落ち着き、早ければ 10 月下旬には降る初雪に向かって、季節が慌ただしく動きます。山の頂上から始まる紅葉は、徐々にふもとに広がり始めます。

市街地にも紅葉の季節が到来したことをいち早く告げるのが、街路樹や公園などでよく見かけるナナカマド。真っ赤な実をつけ葉も赤く色づき始めると、市民は本格的な秋を感じ、いよいよ冬が近いことを再確認するのです。市内のおもな紅葉スポットは、おおむね９月下旬から 10 月上旬にかけて色づき始め、中旬から下旬にかけて見頃を迎えます。

イチョウ並木（北大金葉祭）

北大の北 13 条門から約 350m 続くイチョウ並木は、10 月下旬に黄金色のトンネルとなり多くの人が訪れます。この時期に合わせて北大金葉祭が開催。イチョウのライトアップや落ち葉を使った自然工作体験などで楽しませてくれます。

郊外では、何といっても豊平峡ダムなど定山渓エリアが人気。札幌国際スキー場ではゴンドラの特別運行が実施され、空中から眺める色鮮やかなパノラマは格別です。

また、実りの秋を祝い、味覚を楽しむ新しい風物詩として平成 16 年（2008 年）に始まったのが、大通公園を中心に開催される「さっぽろオータムフェスト」。丁目ごとに異なるコンセプトで、道内各市町村の特産品、旬の食材、ご当地グルメやラーメン、お酒などのうまいものが全道から集結します。

さっぽろオータムフェスト

【日本初の大規模イルミネーション】

クリスマスが近づくと全国各地でイルミネーションイベントが行われます。東京の原宿表参道や、長崎のハウステンボス、神戸のルミナリエなどが特に有名ですが、実はその先駆けだったのが、札幌のホワイトイルミネーションなのです。

今から 40 年ほど前、札幌の観光は春から夏が中心でした。札幌市では、観光客の少ない季節の魅力を伝える方法を模索。そのヒントとして検討されたのが、アメリカ・ニューヨークのロックフェラーセンターのクリスマスツリーでした。イルミネーションの点灯式には有名なミュージシャンがライブコンサートを行い、ツリーの周りは観光客や地元の人々で常に混雑しています。これを札幌でもできないか、と話し

合われました。

そして昭和 56 年（1981 年）12 月 12 日、「ホワイトイルミネーションさっぽろプラザ」という名前でそれが実現。大通公園に白いクリスマスツリーの形のオブジェが 1 基設置され、1,048 個の電球に光が灯ります。オブジェの下ではエレクトーンのライブ演奏も行われました。その様子は全国に伝えられます。会場は少しずつ広がり、昭和 60 年（1985 年）には当時の自治省と札幌市から「都市景観賞」が贈られました。この頃から、全国で観光を目的としたイルミネーションイベントが盛んに行われるようになったのです。

現在は電球に替わり、約 81 万個の LED が街を幻想的な光で包んでいます。

ホワイトイルミネーション
（上：1982 年、下：2015 年）

【中学生が始めた、さっぽろ雪まつり】

今や国内はもちろん、海外でも広く紹介されるさっぽろ雪まつり。始まったきっかけが、終戦後に増え続ける青少年の犯罪を何とかしたいという商工関係者の思いからだったことは、あまり知られていません。

参考になったのが、小樽の北手宮小学校で戦前から行われていた雪像作りの行事「雪祭り」。若者たちがエネルギーを発散する場にもなり、観光客を呼び込むこともできて、一石二鳥だと考えたのです。

昭和 25 年（1950 年）２月、雪捨て場になっていた大通公園の西７丁目で札幌市内の中学校２校・高校３校の生徒たちが、美術科教諭の指導を受けながら６基の小雪像を制作。当時は煤煙で薄黒い雪を一度山に積んで踏み固め、ノミで削り出す方法で、現在の精巧な雪像に比べると荒削りの仕上がりでした。また、雪像の他に歌謡コンクール、スクエアダンス、演芸大会、犬ぞりレース、スキー仮装行列、映画の上映なども行われたそうです。多くの市民が集まり大成功。翌年以降も継続することになりました。

「昇天」（第4回さっぽろ雪まつり）

「豊平館」（第 73 回さっぽろ雪まつり）

昭和 28 年（1953 年）の第４回で伏見高校（現札幌工業高校）が制作した「昇天」

は、高さ 15m もある大きなものでした。生徒たちは事前に大通周辺の建物の高さを測り、雪像の大きさを決めたといいます。「雪で作ったものはすぐに壊れる運命にある。それならより大きいもので皆さんに喜んでもらおう」という発想がきっかけだったそうで、これが後の大雪像の始まりでした。

翌年の第５回からは市民雪像が加わり、第６回からは陸上自衛隊も雪像制作に参加。しかし一方で、中学生・高校生による雪像制作は受験や就職活動との両立が困難になってきたことからこの年で打ち切られます。

昭和 30～40 年代に、雪まつりは全国に、そして世界に知られるようになりました。第２会場として真駒内会場が設けられたのは昭和 40 年(1965 年)から平成 17 年(2005 年)。陸上自衛隊真駒内駐屯地の広大な敷地には滑り台のある大雪像が並び、特に子どもたちの絶大な人気を集めました。

現在は大通公園、つどーむ、すすきの（氷の祭典）の３会場で開催。国際雪像コンクールなども行われています。

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	円山原始林	記念物	国指定天然記念物
2	円山公園	記念物	
3	北海道大学のクロユリ	記念物	
4	札幌最古のライラック（北海道大学植物園内）	記念物	
5	北海道大学植物園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.78
6	大通公園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.80
7	ライラックまつり	無形民俗文化財	
8	三吉神社	有形文化財	
9	YOSAKOI ソーラン祭り	無形民俗文化財	
10	札幌まつり（北海道神宮例祭）	無形民俗文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（まつり・行事）No.97
11	中島公園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.81
12	ビアガーデン（さっぽろ夏まつり）	無形民俗文化財	
13	サッポロビール博物館（旧札幌麦酒製麦所）	有形文化財	札幌景観資産第 31 号 さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.1
14	北海盆唄、子供盆おどり唄	無形民俗文化財	
15	北大金葉祭	無形民俗文化財	
16	さっぽろオータムフェスト	無形民俗文化財	
17	さっぽろホワイトイルミネーション	無形民俗文化財	
18	ミュンヘンクリスマス市	無形民俗文化財	
19	狸小路	その他	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.83
20	さっぽろ雪まつり	無形民俗文化財	

■関連文化財の分布

関連文化財群マップ＜風物詩＞
北大金葉祭
北海道大学のクロユリ
サッポロビール博物館
（旧札幌麦酒製麦所）
札幌最古のライラック
大通公園
北海道大学植物園
北海盆唄、子供盆おどり唄
札幌まつり
（北海道神宮例祭）
三吉神社
狸小路
円山公園
円山原始林
中島公園
大通公園での催し物
ライラックまつり
YOSAKOI ソーラン祭り
ビアガーデン（さっぽろ夏まつり）
さっぽろオータムフェスト
さっぽろホワイトイルミネーション
ミュンヘンクリスマス市
さっぽろ雪まつり
凡例
構成文化財
道路
河川

関連文化財群７　雪や氷と共にある暮らし　ー厳しい冬を克服し、利用し、楽しむ

■概要

札幌は１年の約３分の１が冬日（最低気温が氷点下）で、ひと冬の降雪量は約５m。これほど多くの雪が降る大都市は、世界でも珍しいと言われています。この厳しい寒さと雪を、先人たちはさまざまな知恵で克服し、利用し、楽しんできました。冬の暮らしから生まれ、受け継がれてきた独特の習慣や文化もまた、私たちの歴史遺産なのです。

■ストーリー

【試された、それまでの住宅の常識】

住宅の断熱性能や効率の良い暖房、雪に対応する屋根など、北海道の厳しい冬を快適に暮らすための住まいの技術は、現在も日々進化を続けています。

アイヌの人々の住宅は「チセ」と呼ばれ、囲炉裏の熱が土間の地面に蓄積されるなど、暖かく過ごすための知恵と工夫が詰まっていました。一方、和人は当初、高温多湿の気候に向いた伝統的な日本家屋の常識からなかなか抜け出すことができなかったといいます。入植して最初に建てた粗末な開拓小屋が相当寒かったであろうことは容易に想像できますが、そこから脱してようやく建てた日本家屋もやはり寒く、布団の襟元が吐く息で凍ったなどの苦労話が数多く伝わっています。

屯田兵には最初から住宅が支給され、家づくりの苦労がないという点では恵まれていたものの、初期に建てられたのはやはり日本家屋でした。

開拓小屋

【寒冷地で快適に暮らす住宅への試行錯誤と発展】

移住者を定着させ、経済と産業を発展させなければならない開拓使にとって、防寒のための家屋の改良は急務でした。

明治 11 年（1878 年）、開拓使長官の黒田清隆はロシアで視察した丸太小屋やペチカの防寒性を高く評価します。官舎や学校、屯田兵の家屋などをロシア式で建設し、ペチカの製造法も学びました。しかし、材料の確保が難しい上に構造が複雑で普及せず、やがて時計台や旧開拓使本庁舎に代表されるアメリカ式が主流となります。

永山武四郎邸

とはいえ住宅となると、洋風建築は靴を脱ぐ日本人の生活様式になじみませんでした。そこで、明治 10 年代前半に屯田事務局長時代の永山武四郎（後の北海道庁長官）

は和洋折衷の住宅を建設。その後の住宅建築にも影響を与えました。

断熱性を高め蓄熱効果を持つ建材としてはレンガや札幌軟石などがありましたが、一般には高価で、長らく蔵など限定的な使用に留まっていました。それに代わって戦後に広く普及したのが三角屋根コンクリートブロック造住宅です。雪が落ちやすい急勾配の三角屋根を持つコンクリートブロック住宅の団地は、札幌の暮らしを象徴する風景でした。これにより、ようやく多くの市民が寒さから解放されたとも言えます。

コンクリートブロック住宅

現在、高性能な断熱素材や工法で住宅の断熱性・気密性は格段に向上しました。エネルギー効率の良い暖房器具の改良も進み、積雪寒冷地での暮らしは快適に進化しているのです。

【北海道ならではの進化をとげた除雪】

気温が低い北海道の雪はサラサラとしており、また踏み固められると容易には溶けない氷盤になるのが特徴です。

日本に古くから伝わる除雪道具の一つが、「コスキ」などと呼ばれるボートのオールのような形をした一枚板の木製スコップ。湿った重い雪を切り分けながら捨てるのに適していました。北海道ではサラサラの雪に対応するために、3 面を縦板で囲んで雪が落ちにくい工夫が加えられます。やがて、大量の雪を押す雪押し（ダンプ）、より少ない力で遠くに投げ飛ばす道具、氷盤を安全に割る道具なども誕生。暮らしの中で、今も少しずつ改良され続けています。

昔の除雪道具

そして、市民生活に欠かせない交通を雪から守ることは、長年にわたって行政や交通事業者の課題でした。雪対策として、地下鉄南北線の地上走行区間では、軌道全体を金属製のシェルターですっぽりと覆う方法を採用しました。また、冬の札幌市電の走行を助けるのは、雪を豪快に跳ね飛ばすササラ電車。札幌の冬の風物詩としても知られています。ササラとは竹ひごを束にしたブラシのこと。弾力性に優れ、回転させればレールを傷つけることなく雪を遠くへ飛ばせるとあって、札幌では大正時代から活躍しています。大雪でバスが動かない日でも路面電車は動いていることが多く、市民からの信頼も絶大。電車事業所では現在、常設の見学コースなどの整備が進められています。

ササラ電車

【雪をエネルギーとして利用する「利雪技術」】

彫刻家のイサム・ノグチがデザインを手がけたモエレ沼公園。そのシンボルであるガラスのピラミッド「HIDAMARI」の内部は、夏になると温室のように暑くなってしまいます。それを快適な温度に保つのが、冬の雪を利用する冷房システムなのです。

毎年３月に、公園内に積もった雪を専用の雪倉庫に運び入れます。その雪が融けた冷水を熱交換機に循環させることで、各部屋に冷えた空気が送り出されます。そして、各部屋の暑い空気が熱交換機を通して戻り、温まった水が雪倉庫内の雪をさらに融かして冷水を発生させるという仕組み。通常の冷房システムで冷水を発生させるためには電気やガスなどの熱源が不可欠で、必ず CO2 が発生してしまいます。一方、雪冷房システムでは雪融けの冷水を利用するので冷やすための熱源が必要なく、CO2 を発生させないというメリットがあります。また、札幌駅北口広場に設置されているのが都心北融雪槽。地域冷暖房プラントからの熱水を熱源として融雪槽の内部の温度を 40℃前後に保ち、雪を融かしています。都心の雪を都心で処理することで、排雪用ダンプトラックの移動距離や移動時間を大幅に短縮し、比較的早く排雪が進むので道路幅が確保され渋滞が避けられるなどのメリットがあります。融雪槽内の温水によって融かされた雪は、沈殿物を取り除いた上で直接下水道に流されます。また、融雪の必要がない夏には、災害時の防火用水槽としても有効利用されています。

モエレ沼公園のガラスのピラミッド

都心北融雪槽

かつては除雪して捨てるしかなかった雪を天然のエネルギー源として活用し、CO2 削減にもつながる利雪技術は、積雪寒冷地のこれからのあり方を示しています。

【雪や寒さを楽しむ気持ちを持ちながら】

朝起きてカーテンを開けると、窓の外の風景が真っ白に変わっていることがあります。夜の間に降った雪が昨日まで見えていた屋根の色や道路のアスファルトを覆い尽くし、澄んだ空気がつくる濃い青空を背景にキラキラと輝く風景は、どんなに見慣れていても美しいもの。「また雪かきか、うんざりだな」と言いつつも、雪景色を見た瞬間には思わず笑顔になってしまう人もいるのではないでしょうか。

これほどの雪に囲まれて長い期間を過ごすからには、それを楽しまない手はありません。札幌の子どもたちは、雪だるまを作ったりそり遊びをしたり、穴を掘って秘密基地を作ったりと、思い思いの工夫をして遊びます。大人たちの中にもまた、冬ならではのファッションを楽しんだり、冬キャンプを満喫したり、サウナから雪の中に飛び込んだり、玄関先にスノーキャンドルを作って灯したりして楽しむ人が少なくありません。冬を楽しもうとする気持ちは、生活の知恵なのかもしれません。

また、昭和 25 年（1950 年）に第 1 回を実施し、今や国内はもちろん、海外でも広く紹介される「さっぽろ雪まつり」や、アメリカ・ニューヨークのロックフェラーセンターのクリスマスツリーを参考にして、昭和 56 年（1981 年）に始まった「さっぽろホワイトイルミネーション」など、大通公園の冬のイベントは市民はもちろんのこと多くの来訪者を楽しませています。

さっぽろ雪まつり（すすきの会場）

そして、冬の厳しい寒さがあるからこそ、暖かい春を迎える喜びが大きいということも、北国で暮らす私たちが実感している楽しさの一つであると言えそうです。

【寒さが育んだ札幌の食文化】

「北海道では冬に部屋を暖かくして半袖シャツで過ごし、アイスを食べる」という話がメディアでしばしば取り上げられます。実際に、高気密住宅の室内は暖房で暖かく、アイスや冷たいビールが欲しくなるもの。厚着をしてこたつに入り、背中の冷気に震える東京などの冬とはまるで違います。一方、氷点下の街を歩き体が冷え切ったところで味わうラーメンは格別で、スープ表面の油分で冷めにくい味噌ラーメ

エドウィン・ダン記念館

ンなどは、冬に味わってこそその真価を発揮します。

また、札幌では寒冷な気候を利用した農業の研究や実験が明治初期から行われてきました。明治９年（1876 年）に開拓使のお雇い外国人として札幌に赴任したエドウィン・ダンは、真駒内に牧場を開設し、酪農や畜産、乳製品（バター、チーズ、練乳）の製造などを指導。やがて北海道で酪農や畜産が発展する基礎を築きました。

札幌大球

札幌の伝統野菜である巨大なキャベツ、札幌大球は、まずそれ自体が雪の下などで保存できる冬場の貴重なビタミン源。そして、それを使うニシン漬けは、北海道の初冬の寒さがなければおいしく作ることができません。

【気軽に楽しむウインタースポーツ】

昭和 47 年（1972 年）に冬季オリンピックが開催された札幌。ウインタースポーツは昔から市民にとって身近なものでした。

日本に初めてスケートが伝えられたのは明治 10 年（1877 年）のこと。札幌農学校（後の北大）の教師だったウィリアム・ブルックスが、アメリカから持参したスケート靴で学生たちに滑って見せたのが最初とされています。やがてスケート熱は一般市民にも広がりました。高価な輸入品のスケートを取り寄せたり、地元の鍛冶屋さんに見よう見まねで作ってもらったりして、中島公園や道庁の前庭などで滑ったようです。

一方、スキーが札幌に伝えられたのは明治 41 年（1908 年）。前年に札幌農学校から改称した東北帝国大学農科大学教師だったハンス・コラーが母国から用具を取り寄せて学生たちに紹介したと言われています。学生たちは三角山まで足を伸ばし、スロープにジャンプ台を作るなどして楽しみ、山々を縦走する際の拠点となる山小屋がいくつも建設されました。昭和３年（1928 年）の秩父宮様来道やその後の宮様スキー大会開催をきっかけに、スキーもまたスケートと同様に、市民が気軽に楽しむスポーツとして定着しました。

現在は、市内の小学校の授業でスキーが教えられることもあり、スキーは市民には身近な存在です。スキーやスノーボードに適した気候と地形を兼ね備えた大都市は世界でも珍しく、ナイター照明のあるスキー場で仕事帰りにひと滑り、というライフスタイルも可能。市内には、都心から近い札幌藻岩山スキー場、ボードパークが楽しめるさっぽろばんけいスキー場、温泉街に近くゴールデンウィークまで豊富な雪に恵まれる札幌国際スキー場など大小さまざまなスキー場が充実しています。

札幌藻岩山スキー場

市内のスキー発祥の地である三角山、宮様スキー大会発祥の地である宮の森には現在スキ

一場がありませんが、その名残とも言えるのが、周辺にある大倉山、宮の森、荒井山のジャンプ競技場。ジュニア大会から国際大会までが毎年数多く開催され、世界最高水準の競技を観戦することができるのも、ウインタースポーツ都市・札幌の魅力の一つなのです。

■関連文化財一覧

関連文化財群の構成要素一覧

No.	名　称	分　類	指　定
1	チセ	有形文化財	
2	開拓小屋	有形文化財	
3	旧永山武四郎邸	有形文化財	道指定有形文化財
4	三角屋根コンクリートブロック造住宅	有形文化財	
5	旧有島家住宅	有形文化財	
6	昔の除雪道具	有形民俗文化財	
7	地下鉄南北線のシェルター	有形文化財	
8	ササラ電車	有形民俗文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（用具）No.96
9	モエレ沼公園	記念物	
10	都心北融雪槽	その他	
11	さっぽろ雪まつり	無形民俗文化財	
12	大通公園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.80
13	中島公園	記念物	さっぽろ・ふるさと文化百選（街並）No.81
14	エドウィン・ダン記念館	有形文化財	国登録有形文化財
15	札幌大球	記念物	
16	スキー・スケートの伝来	その他	さっぽろ・ふるさと文化百選（用具）No.92
17	札幌藻岩山スキー場	記念物	
18	さっぽろばんけいスキー場	記念物	
19	札幌国際スキー場	記念物	
20	三角山	記念物	
21	大倉シャンツェ	有形文化財	さっぽろ・ふるさと文化百選（建物）No.16
22	宮の森ジャンプ競技場	記念物	
23	荒井山シャンツェ	有形文化財	
24	藻岩原始林	記念物	国指定天然記念物

■関連文化財の分布

関連文化財群マップ＜積雪寒冷地＞
三角屋根コンクリートブロック住宅（屯田団地）
モエレ沼公園
昔の除雪道具
都心北融雪槽
さっぽろ雪まつり大通公園
旧永山武四郎邸
札幌大球
三角山
スキー・スケートの伝来
大倉シャンツェ
荒井山シャンツェ
宮の森ジャンプ競技場
中島公園
開拓小屋旧有島家住宅
さっぽろばんけいスキー場
ササラ電車
藻岩原始林
札幌藻岩山スキー場
地下鉄南北線のシェルター
エドウィン・ダン記念館
【定山渓方面】
札幌国際スキー場
チセ
凡例
構成文化財
道路
河川

4 関連文化財群の保存・活用に関する課題・方針

計画で整理した札幌の歴史文化の特徴を基に、市民ワークショップによる市民意見を踏まえて、令和５年度までに７つの関連文化財群を設定してきました。

しかし、札幌の歴史文化の特徴のなかで、まだ関連文化財群を設定できていないものがあるため、今後も、広く市民の意見を取り入れながら、札幌らしさを表す関連文化財群を順次設定していくことが必要です。

また、関連文化財群等を活用するためには、関連文化財群を構成する個々の文化財を守り伝えていく取組も必要となります。

活用の面では、関連文化財群とその構成要素をつなげるストーリーを観光に生かす仕組みを検討するためのモニターツアーを実施し、文化財をコースの一部とする旅行商品の造成は見られたものの、より関連文化財群等を活用してもらうため、観光事業者やメディア等に関心を持ってもらう取組が必要です。

さらに、関連文化財群等を観光に活用するだけではなく、地域への愛着を育むきっかけとするため、市民向けへの情報発信も求められます。

今後、札幌の歴史文化の価値や魅力を、より分かりやすく、多くの人たちに伝えるため、効果的な活用方法について検討を進めていくことが必要です。

5 関連文化財群の保存・活用に関する措置

○「関連文化財群とストーリー」のＰＲと活用（全関連文化財群）

○その他（関連文化財群の構成文化財に関する措置）

- 札幌市埋蔵文化財センターの管理・運営（縄文文化）
- 文化財等施設の効率的な維持・保全（開拓使）
- 旧札幌控訴院庁舎保存修理事業（札幌軟石）
- 時計台保存修理事業（開拓使）
- 体験学習施設「丘珠縄文遺跡」の管理・運営（縄文文化）